始

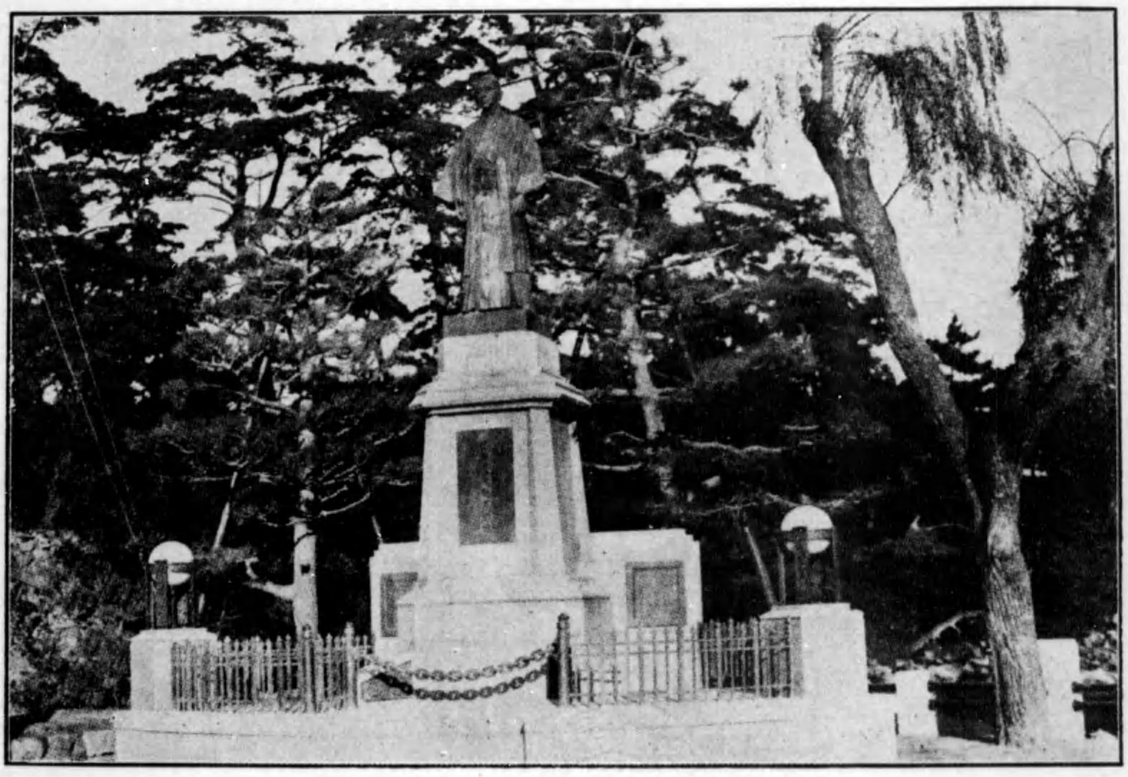
289
N3/1

中部要覽

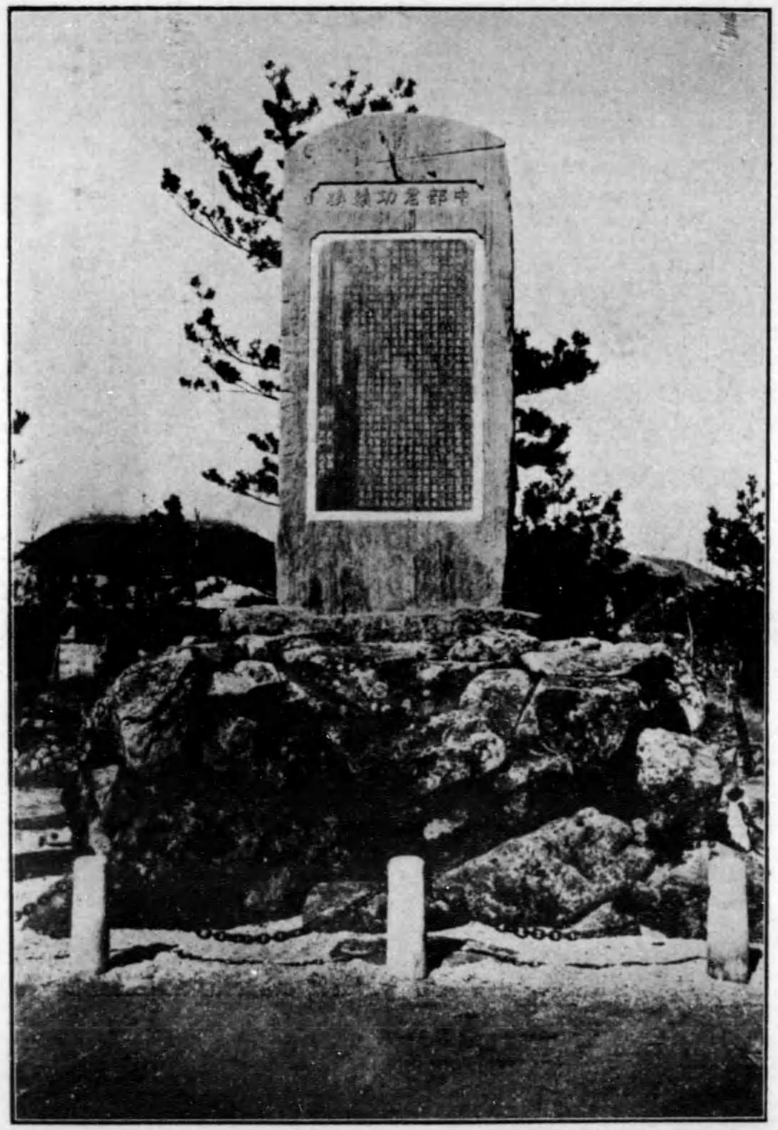
明石市教育會編

昭和圖書
明石市

株式會社林兼商店社長
中部幾次郎氏

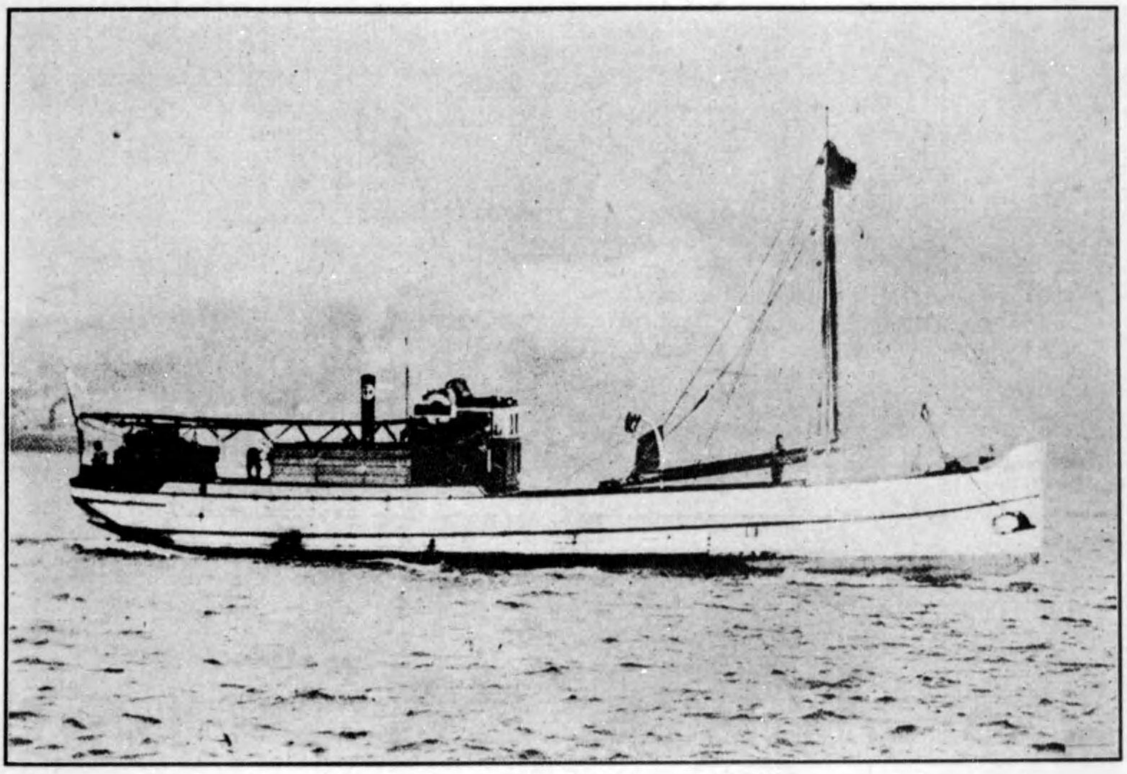


中部幾次郎氏壽像

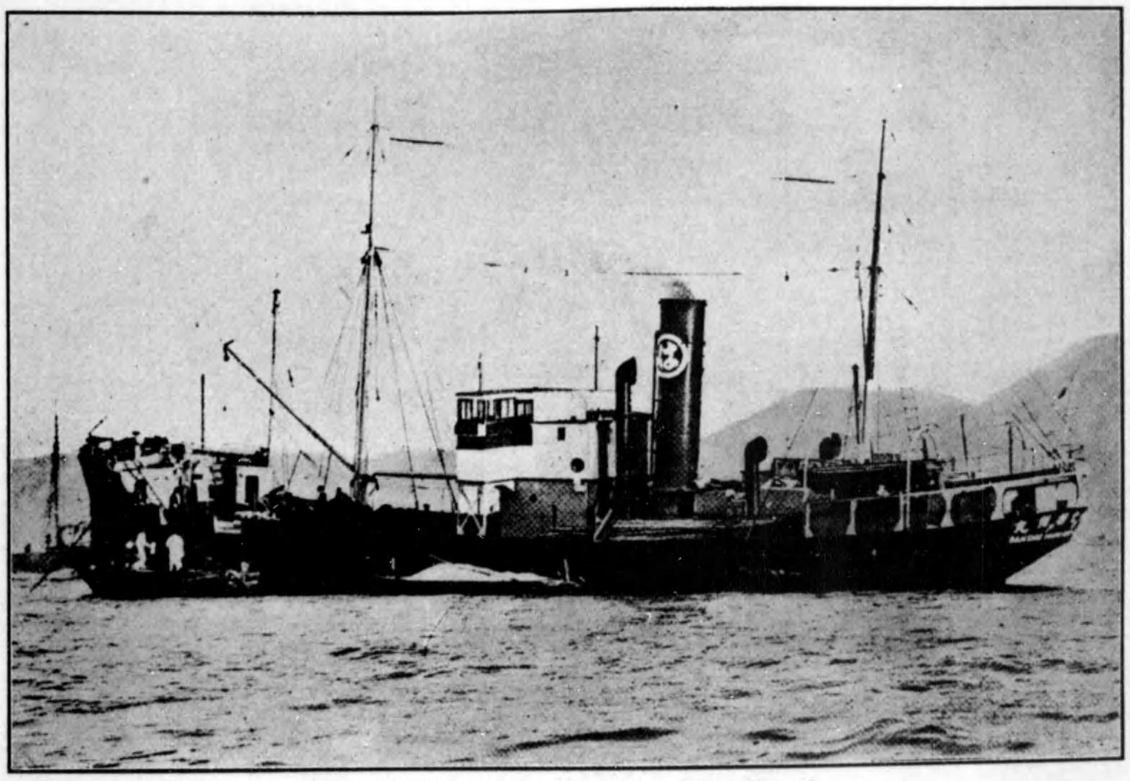


中部幾次郎氏功績碑

中部幾次郎氏の家族及親戚

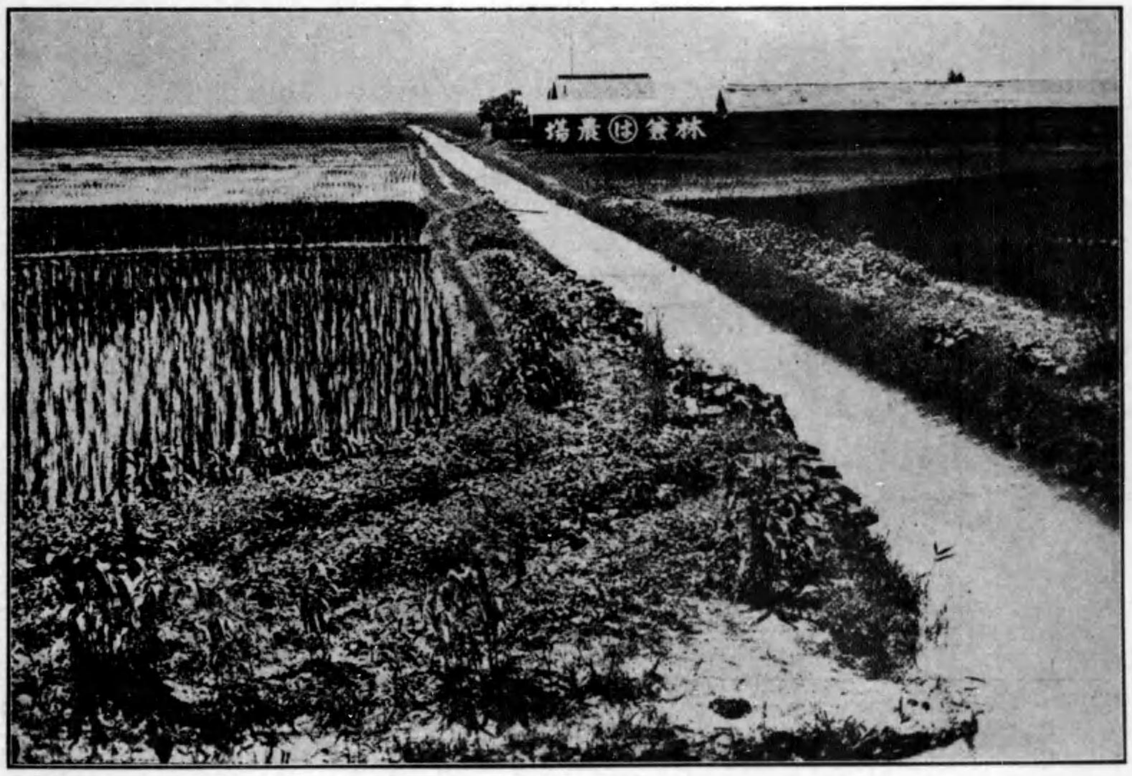


鮮魚運搬船第一新生丸

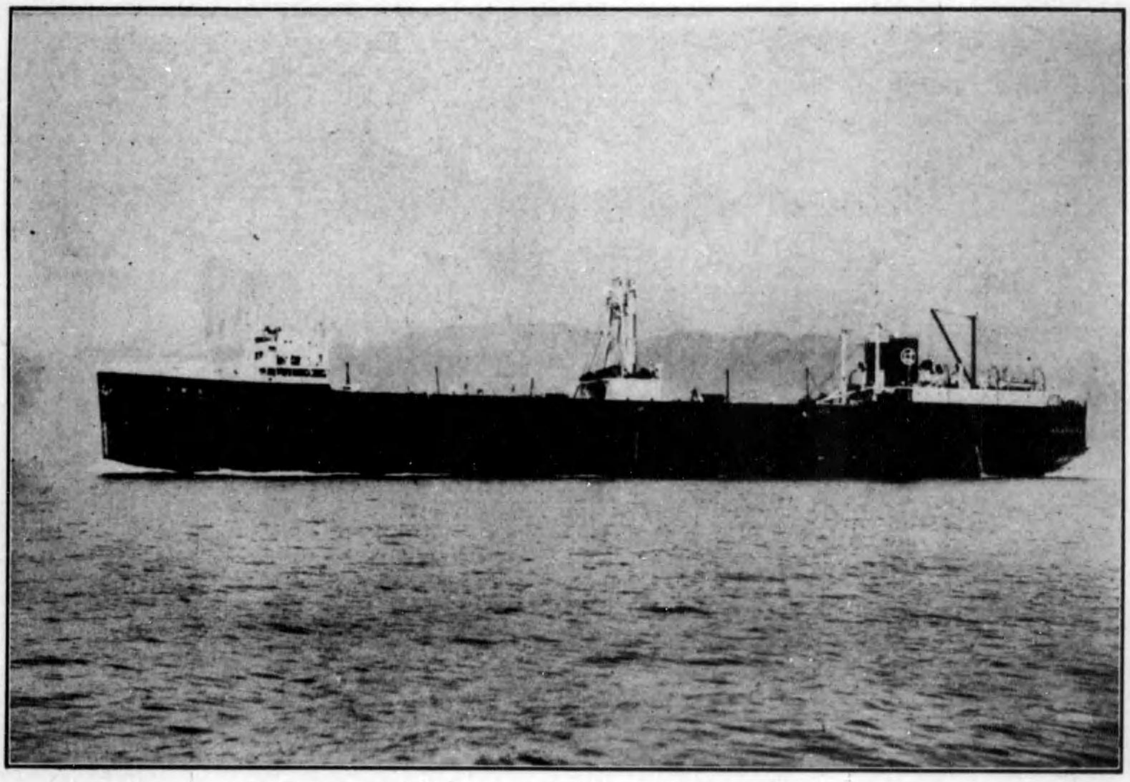


丸州播七十第船藏冷

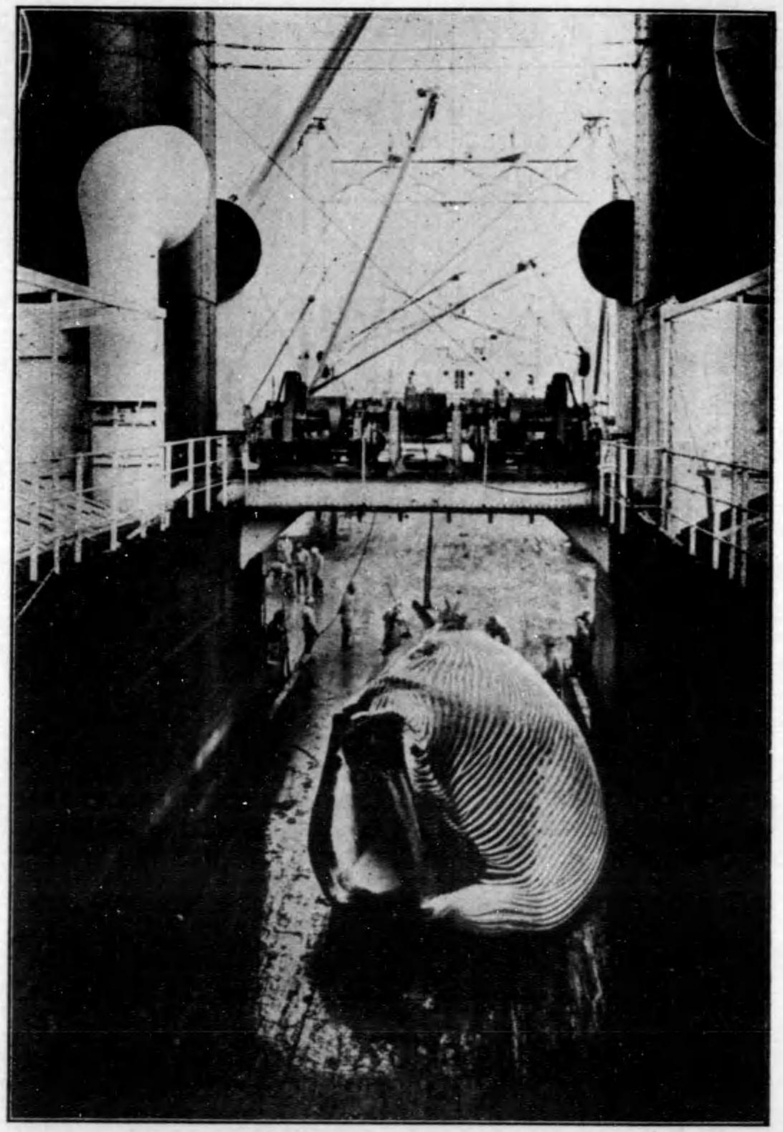
室詰鱈肉魚凍冷庫臓冷島彦



金海農場事務所



竣工せる日新丸（昭和十一年九月二十八日）



（22米）鯨須長るは横にイェウ・ブッリス

904
197

小序

今や世界情勢の急迫は、殆ど各國を擧げて興亡の岐路に立たしむる感がある。而して皇國は日滿支一体一如の核心となつて、大東亞共榮圏確立の國是達成に邁進せねばならない。此の秋に方り我が國に最も必要な、否寧ろ我が國の興廢を決すとも云ふべき人物は、策士でもなければ又所謂敏腕家でもなく、生一本の熱烈な底知れない非凡な達識あり、且獨創力の豊富な傑士である。

中部幾次郎翁が夙に水産振興に非凡な達識と創見とを有せられ且卓絶な奮鬪努力を捧げられ、石油發動機船の改良進歩を圖り、生魚輸送に一新紀元を劃し、或は水産漁獲・加工に冷凍にとあらゆる水産事業に常に斯道の先覺者として貢献せられたる其の功績

は、實に我が國産業史上に不朽なるが上に、或は朝鮮農場開拓殊に南氷洋國際捕鯨戰にと樹てられたる偉勳は枚擧に遑なく、而して翁が一己の利のみを念とせず、其の收益を以て公益世務に貢献せられたる事蹟も亦世上周知の事實である。

本市教育會は皇紀二千六百年の佳辰に方り、特旨により翁の叙位の榮に浴せられたるを祝し、併せて鄕黨の誇である翁の事蹟の大要を記し、國民學校兒童並に青少年學徒の活模範とすべく、こゝに本書の編述を企てたのである。皇國の發展を双肩に荷へる第二の國民の中に、翁の偉業に感奮興起する者の續出せんことを切望する次第である。

本書編纂に當つて水産新聞社長柴信一氏は多年苦心研究の成果たる翁の水産界に於ける資料を提供され、明石中學校教諭高尾重夫氏は終始余を扶け本書の編述と資料の搜索に從事し、其の間林兼商店常務取締役伊東猪六氏、明石市高月和一氏、菊池德次郎氏は種々活資料を提供せられ、更に篤學佐々木壽雄氏は修訂增補の任に當り、清新精緻なる筆致にて翁の行實と面目とを發揮された。輝く皇紀二千六百年の佳き年に此の書の成る、素より中部幾次郎翁の偉大なる人物によるも亦以上の諸氏の翁に私淑し至誠事に當られたる賜なるを思ひ、こゝに深く其の勞を多とする次第である。

皇紀二千六百年
昭和十五年十二月

明石市教育會長　山内佐太郎識

人世由來在至誠
至誠發處即公明
百年壽命一呼吸
千古須貽不朽名

目次

中部翁略年譜……一
第一章　序說……一一
一、緒言……一一
二、翁の先祖……一三
三、翁の兩親……一四
四、翁の兄弟……一五
第二章　雌伏時代……一七
一、翁の少年期……一七
二、翁の青年期……一八
三、淡路丸……二〇

第三章　活躍時代(一)……二二
産業人としての翁
一、發動機船新生丸……二二
(一)　新生丸の誕生……二二
(二)　朝鮮漁場乘入……二六
(三)　航海受難談……二九
(四)　無鐵砲な奴……三二
(五)　窮通打開の途……三三
二、發動機製作……三五
(一)　發動機改善の努力……三五
(二)　彦島造船鐵工所……三七
三、朝鮮漁業の啓發……四〇
(一)　苦心慘澹……四〇
(二)　創案の鰮巾着網……四一

(三)　機船手繰網……四四
四、朝鮮農場の開發……四五
五、南支、台灣漁場調査……四九
六、蘇聯沿海州沖取漁業……五〇
七、冷藏庫と小型冷藏船……五三
八、南氷洋の捕鯨戰……五六
(一)　準備時代……五六
(二)　捕鯨事業の有望性……五八
(三)　日新丸の建設……五九
(四)　國際捕鯨爭覇戰……六二
九、逸話斷片……六五
第四章　活躍時代(二)……七三
社會人としての翁

一、明石市と翁……七三
明石公園の壽像
二、明石中學校と翁……八一
三、方魚津と翁……八五
頌德碑
四、下關市と翁……九〇
五、無上の光榮……九三
第五章　大成時代……九五
一、最近の翁と其の家庭……九五
二、處世訓……九七
三、翁の現職……九七
四、株式會社林兼商店概況……九九
後記……一〇四

中部翁略年譜

皇紀	年號	年次	年齡	年譜
二五二六	慶應	二	一	正月四日播磨國明石東魚町ニ生ル、兼松ノ二男
二五二七	同	三	二	
二五二八	明治	元	三	
二五二九	同	二	四	
二五三〇	同	三	五	
二五三一	同	四	六	
二五三二	同	五	七	
二五三三	同	六	八	三月兄甚藏死去ッ幾次郎相續人トナル
二五三四	同	七	九	
二五三五	同	八	一〇	
二五三六	同	九	一一	
二五三七	同	一〇	一二	此頃ヨリ幾次郎家業ニ勵ム

二五三八	明治一一	一三	
二五三九	同	一二	一四
二五四〇	同	一三	一五
二五四一	同	一四	一六
			和田林之助姉とみノ婿トシテ中部家ニ入ル、幾次郎父及姉婿ヲ助ケテ四國九州方面ヘ魚買出シニ從事ス
二五四二	同	一五	一七
二五四三	同	一六	一八
二五四四	同	一七	一九
二五四五	同	一八	二〇
			明石郡神出村藤井佐藏三女こま十八歳ト結婚ス
二五四六	同	一九	二一
			五月姉婿林之助死去ス廿九歳、幾次郎ノ任重キヲ加フ
二五四七	同	二〇	二二
二五四八	同	二一	二三
二五四九	同	二二	二四
			一月長女もと出生ス、八月一日みつ死去ス六十一歳
二五五〇	同	二三	二五
二五五一	同	二四	二六

二五五二	同	二五	二七
			二月長男兼市出生ス
二五五三	同	二六	二八
二五五四	同	二七	二九
			四月二女とめ出生ス
二五五五	同	二八	三〇
二五五六	同	二九	三一
			三月二男謙吉出生ス
二五五七	同	三〇	三二
			小汽船滚路丸ヲ借入レ之ヲ曳船トシテ鮮魚ヲ大阪雜喉場ニ急送ス
二五五八	同	三一	三三
二五五九	同	三二	三四
			三月三女よし出生ス
二五六〇	同	三三	三五
二五六一	同	三四	三六
			三月三男利三郎出生ス
二五六二	同	三五	三七
二五六三	同	三六	三八
二五六四	同	三七	三九
			下關市ヲ林兼水產業ノ根據地トス
二五六五	同	三八	四〇
二五六六	同	三九	四一
			日本最初ノ發動機船新生丸幾次郎ノ苦心考案ニ依テ竣工ス、幾次

二五六七	明治四〇	四二		郎船長長男兼市機關長トシテ活動ス
				日本海方面ニ遠航京都府舞鶴、伊根ニ於テ鰤ヲ、福井縣小濱、兵庫縣津居山ニ於テ鰈ノ買出シニ成功ス
二五六八	同 四一	四三		朝鮮釜山ニ航シ羅老島ヲ根據地トス
				八月長女淡路國津名郡ノ安居院廣助ニ嫁ス
二五六九	同 四二	四四		八月廿七日父兼松死去ス八十二歳
二五七〇	同 四三	四五		慶尙南道方魚津ヲ朝鮮諸事業ノ根據地トス、第二新生丸成ル
二五七一	同 四四	四六		次男謙吉買出シニ從事ス
二五七二	同 大正四五元	四七		改良有水發動機二台ヲ第一新生丸ニ、一台ヲ第三新生丸ニ、同六〇馬力ヲ第五新生丸ニ、同八〇馬力ヲ海洋丸ニ据付ケテ何レモ成功ス
二五七三	同 二	四八		南支台灣ニ亘リ漁場開發調査ニ一五〇〇噸ノトロール船ヲ發遣シテ先鞭ヲ着ク
				下關市竹崎町ニ本店ヲ構築ス
				五月長男兼市結婚ス
二五七四	同 三	四九		十一月長孫兼次郎出生ス
二五七五	同 四	五〇		方魚津ヲ漁業本部ニ、九龍浦、二加里、七里浦及ビ江口ヲ漁場トシ巨濟島ヘモ進出ス、第十一、十二、十三、二十三新生丸活躍シテ巨利ヲ占ム
				慶尙南道金海ノ水田未開墾地三百五十町歩ヲ買入、蔚山、東萊、慶州ニモ次々ニ買入ル
二五七六	同 五	五一		巾着網片手廻シノテーブル式ヲ考案實施ス、山口縣水產試驗場ヨリ特許權ノ抗議アリシモ之ヲ一蹴ス
二五七七	同 六	五二		
二五七八	同 七	五三		方魚津小學校新築校舍及敷地ヲ全部寄附シ、同港防波堤築造ヲ唱說シ十萬圓ヲ寄附ス
				下關市彥島ニ林兼造船鐵工所ヲ設立ス
				重油使用ニ依ル無水發動機ノ專賣特許ヲ獲得ス
				土佐捕鯨株式會社ノ株過半數ヲ買收シ經營ノ實權ヲ掌握ス
二五七九	同 八	五四		五月安居院悅良二女ノ婿養子トシテ入籍ス、七月二男謙吉結婚ス

二五八〇	大正	九	五五
			無水式ノ研究完成ス
			巨文島ニテ機船手繰漁業ヲ始メ三漁期失敗ノ後成功ス、彦島冷藏庫ヲ設立ス
			四月金井義吉三女ノ婿養子トシテ入籍ス
二五八一	同	一〇	五六
			慶尙南道官選評議員トシテ模範農場開發ヲ主唱シ、金井鐵次郎ヲ模範敎師ニ招聘セリ
二五八二	同	一一	五七
			明石中學校新設ヲ唱說シ創立費十五萬圓ヲ寄附ス
			小型冷藏船ヲ我國情ニ適スト認メ百四十噸型三隻ヲ新造ス
			十一月公益ノ爲多額ノ金圓ヲ寄附シ功績顯著ナルニ依リ勅定ノ紺綬褒章ヲ下賜セラル
二五八三	同	一二	五八
			道會ノ意見ヲ具シテ有吉朝鮮政務總監ニ折衝シテ農場開發補助金交付ニ贊同セシメ、後任ノ下岡總監ニ依リテ實現セラレタリ
			瑞典製ニ比シテ毫モ遜色ナキ無水式重油發動機セミディゼルヲ製作完成ス
二五八四	同	一三	五九
			九月中部幾次郎個人經營事業ヲ株式會社組織ニ變更シ、資本金五百萬圓株式會社林兼商店、同參百萬圓林兼漁業株式會社、同貳百萬圓林兼冷藏株式會社トス
二五八五	同	一四	六〇
			四月明石市水產會長ニ選任セラル
			五月右ノ三會社ヲ合併シ資本金壹千萬圓株式會社林兼商店トナス其後增資シテ資本金壹千五百萬圓トシ全額拂込濟トナル
二五八六	同 昭和	一五 元	六一
			五月三十一日攝政宮殿下ノ御名代トシテ本多侍從ヲ彦島冷藏庫ヘ差遣セラル
二五八七	同	二	六二
二五八八	同	三	六三
			九月水產業發達ニ盡瘁シ公益ヲ興シ成績顯著ナルニ依リ勅定ノ藍綬褒章ヲ下賜セラル
			明石市會ノ決議ニヨリ十一月明石公園ニ壽像ヲ建設セラル
			方魚津港民ノ熱誠ニヨリ十二月同小學校庭ニ功績碑ヲ建設セラル
二五八九	同	四	六四
			木浦ニ水田壹千町步ヲ購入ス
			配下ノ士佐捕鯨株式會社重役志野德助、日本代表トシテジユネーブノ國際捕鯨會議ニ出席シ、南氷洋捕鯨事業ノ多望性ヲ痛感シ林
二五九〇	同	五	六五

二五九一	昭和	六	六六
二五九二	同	七	六七
二五九三	同	八	六八
二五九四	同	九	六九
二五九五	同	一〇	七〇
二五九六	同	一一	七一
二五九七	同	一二	七二

兼幹部ニ進言シテ具體化ヲ計畫ス

八月下關商工會議所會頭ニ選任セラル

日蘇漁業條約ハ蘇聯當局ノ横暴ニヨリ毎年改訂セラレ、我ガ漁業家ニ不利ヲ與ヘタルニ依リ、沖取漁業株式會社ヲ創立ス

沿海州漁場ノ公海ニ於テ沖取流シ網ヲ斷行シテ成功ス

北千島方面ニ於テ沖取流シ網ニ成功シ蘇聯ノ横暴ヲ牽制ス

脅威ヲ蒙レル日魯漁業株式會社ハ沖取漁業合同株式會社ヲ併合ス

翁ノ雄大ナル氣宇ト川崎造船所ノ献身的努力トニ依リ二萬二千噸日本一ノ鯨工船日新丸ハ驚異的記錄ヲ以テ九月廿八日竣工シテ神戸灣上ニ雄姿ヲ現シ、十月七日捕鯨船八隻ヲ伴ヒテ出帆シ十一月十三日南氷洋漁場ニ到達ス

日新丸ハ此ノ一漁期ニ鯨一、一一六頭製油量一五、二八〇噸尾羽壷藏物三五、〇〇〇貫ヲ獲、隊長林兼常務取締役中部利三郎以下三百七十餘名ノ隊員ハ四月廿二日下關ニ安着ス

二五九八	同	一三	七三
二五九九	同	一四	七四
二六〇〇	同	一五	七五

三月二十日高松宮殿下本社彦島各工場御視察アラセラル

八月廿四日妻こま死去ス七十三歳

十二月明石中學校講堂新築費十萬圓理科室新築費三萬圓ヲ寄附ス

山口縣關係ノ公共團體ヘ昭和十二年ヨリ同十五年マデニ寄附セル金額二十萬圓ニ達ス

十一月十日紀元二千六百年式典ニ際シ特旨ヲ以テ位紀ヲ賜ヒ正六位ニ敍セラル

十二月十六日林兼商店及大洋捕鯨株式會社ハ金百萬圓ヲ陸海軍ニ折半献金シ下關市廳ニ寄託ヲ了ス

第一章　序說

一、緒言

風光明媚の明石公園に遊ぶ者は、先づその公園の入口に、巍然として立てる銅像を仰ぎ見るであらう。折目正しい羽織袴の端然たる立像、その温和淳朴なる風格はこの地の佳景と相調和してゐるものゝ如くである。しかしその炯々たる眼光は、非凡の識見と遠大の氣宇に充ち滿ちて、おのづから人をして低回去る能はざらしめるものがある。これこそ明石の生んだる近代の偉傑林兼商店社長中部幾次郎翁である。身三軍を叱咤する雄將でもなく、廟堂に立つて國政に參與する宰相でもなく、たゞ在野の一介の產業人でありながら、而も德望一世に遍くして、鄉黨より報いられるに壽像を以てせられ、永く千載に殘されることは、眞に大丈夫の本懷とすべきものであらう。內は林兼商店の各種の水產漁業、加工業、運搬販

賣業、冷凍冷藏工業、造船鐵工業等より製塩、精米、肥料などの農業分野に至るまで、一萬の社員從業員、船員、漁業員、工手農民の手を通じて、莫大なる國利民福を圖り、外は爽快なる㊗の旗幟をかざし、遠く南氷洋にまで活躍せしめて國際收支の改善に貢献し、日本男子の意氣を世界に示すが如きは、誠にわが明石市絶大の名譽であらねばならぬ。

産を成すは已に難く、之を散ずるは更に難しとする所であるが、而も翁は或は教育に勸業に、土木、警防、衛生に、或は官公衙學校の創立、建築に對して、屢々鉅萬の富を寄附して公益世務の進展を圖り、人は各々その職域に於て國家に奉仕するは當然の責務であると確信して居られるのであり、その數々の美事善行は洵に欽仰すべきものがある。

嘗て大正十一年には勅定紺綬褒章を、昭和三年には同藍綬褒章下賜の恩命を蒙られたが、更に紀元二千六百年式典の盛儀に際して、忝くも特旨叙位の皇恩に浴せられたのは、獨り翁一家一門の無上の光榮たるのみならず、實に翁の鄕土明石市の空前の誇り、限りなき譽れであることを、最も欣快とするものである。

翁の産業人としての經歷は頗る波瀾に富み不屈不撓勇往邁進の龜鑑であり、社會人としては自ら奉ずること儉素、常に公益事業に盡瘁して敬仰に値ひするものが甚だ多い。所謂立志傳中の巨擘と稱するも溢美で無い。翁の傳記はその百歳の後を俟つを禮儀とするから、爰には昭和十五年までの梗概を編して、以て他日の資料とする。

若し夫れ後進を誘掖し、地方青少年の感憤を促すを得ば望外の幸である。

二、翁の先祖

翁の遠祖は源平兩氏一の谷の合戰の時の平氏の落武者の隱れたもので、明石郡平野村常本より出づと云ひ傳へられてゐる。世々利兵衛と稱し漁を以て明石の西郊林崎に居住してゐた。

祖父利兵衛は極めて磊落にして酒を嗜み、地方での學者であつたが、瑣細なる

家事などは意に介せない人であつた。

三、翁の兩親

父兼松はこの豪膽な氣を受けついだ上に、祖父に代り家業に當り辛酸を嘗めたので商略にも富んでゐた。

極めて剛直であり、他人より負けることの大嫌ひの兼松は林崎から明石まで歸るのに、生洲に櫓を付けて、自分の身体は殆ど水浸りになつてもかまはずに平氣であつたといふ樣な話もある。又當時は生魚運搬卸業としても明石近邊の土地で小規模な賣買のみをしてゐた頃であつたのに四國、九州にも渡り、遠く五島の鮪を買ひに行つて皆を驚かしたといふ樣な話も澤山に傳はつてゐる樣に覇氣に富んだ性格を有してゐた。林兼商店の商號は林崎村より出た兼松と云ふので名づけたものである。この兼松は明石生魚運搬問屋仲間として相當重きをなし、八十二歳の高齢で明治四十二年八月二十七日死去した。

母みつ、貞順にしてよく夫を扶けたが明治二十二年八月一日、夫に先立つて六十一歳で死去した。兩親の墓は濱光明寺にある。

四、翁の兄弟

翁は六人兄弟であつて、長男甚藏は不幸にも明治六年三月に夭死した。次男は幾次郎翁で、三男は德治郎といつて明石の生魚卸木綿和こと高月家を繼いだ。長女しげは大阪の原田氏に嫁し、次女とみは婿養子林之助を迎へて家業に從事し、末女いさは明石の大島呉服店に嫁しそれ〴〵裕福に生活してゐたが德治郎は大正九年に、とみ、いさは最近に病歿した。

利兵衛―兼松
　　みつ

甚　藏（明治六年歿）
し　げ（大阪市原田氏ニ嫁ス）
と　み（養子林之助妻　昭和十年歿）
い　さ（明石市大島氏ニ嫁ス　昭和十五年歿）
幾次郎
こ　ま
徳治郎（明石市高月家ヲツグ　大正九年歿）

もと（安居院氏ニ嫁ス）
兼市
とめ（養子悅良ヲ迎フ）
謙吉
よし（養子義吉ヲ迎フ）
利三郎

第二章　雌伏時代

一、翁の少年期

翁は慶應二年正月四日國内風雲漸く急ならんとする時、明石東魚町に呱々の聲をあげた。

この當時の家は柏木某に六十圓にて讓り、鳥居某より現存の家を當時としての大枚五百圓で買取られたのは翁が十四、五歳の時のことであつた。林兼商店はもうこの時は魚問屋仲間中では相當な羽振をきかせてゐたのであるが、父兼松は祖父利兵衛の學問が商賣には益なく、祖母はじめ家人の辛酸艱苦したことを思つて其の子女に始ど學問をさせなかつた。殊に翁八歳の時（明治六年）兄甚藏が夭死してからは、とりわけ人手を要する家業として毎日早朝より父の手傳に餘念なかつた。この頃より剛愎な父をも驚歎させる程てきぱきと仕事をなし終へたのであつ

た。

二、翁の青年期

稍長するに及んでは姉とみの婿養子林之助と共に家業を專心扶けたので、家運も次第に開け、林兼商店は町内魚問屋屈指のものとなつた。兩人は豪膽な父の命により魚買ひ出しのために遠く四國、九州沿岸方面に盛んに出向した。

一日林之助の下關方面の魚買出しに元氣よく出かけたのを見送つた後、翁は中國方面の魚買出しのため備前の下津井の港に泊つてゐる時思ひがけなくも「林之助死すすぐ歸れ」との電報を受取り、夢かとばかり驚き歸宅してみると、林之助はコレラで死んでゐた。大阪に荷揃きに出てゐた父も急遽歸明して來た。

時は明治十九年五月十日で林之助はまだ廿九歳であつた。姉とみは二人の幼兒を抱へた若い寡婦となつて、當時二十一歳の若者たる翁の一家への責務は益々重大となつたのである。越えて明治二十二年には母みつも病歿した。

林之助の歿後は愈々父兼松を扶け、押送り船に乘つて鮮魚の運搬、買出しに從事し、毎日〳〵五島の鮪、阿波の鮮魚を積んで大阪の雜喉場通ひをしてゐた翁の雌伏時代である。

しかしこの頃より翁の秀れた眼は潮を見ることであつた。當時氣象學の發達せぬ時に際して小さな魚船を出して買出し、果して大阪まで着き得るか否かと云ふやうなことを研究してゐて、この天候ならば決行出來ると見ぬく眼をもつてゐた。天氣豫報など全然なかつた時代には人知れぬ大なる研究が重ねられたことであらう。この潮を見ぬく眼力は、「しほ」即ち機會を見透す眼であり、將來を察知する眼であり、軈て獨創開拓の生命力であつた。

又翁は所謂商賣上手であつて、常人が厘毛の利を爭ふ時にも、「高く買つて安く賣る」主義で世人の信用を得た、高く買はなければ魚買出しに成功しないし、安く賣らねば荷揃きに機會を逸することがある。殊に父の豪氣をうけついで、魚仲間で云ふはねこしを行ひ、或地の魚を買〆して而もそれを安く賣る等商人の得

意を増す主義で決行し、林兼商店の名を廣くするやうに努めた等はその偉大な片鱗のあらはれであつた。

三、淡路丸

明治三十年頃は明石沖から播磨にかけては縛り網で鯖や鰆の豊漁が續いた、しかし此の魚を押送り船の運搬では大阪の魚市場に着くまでに時間がかゝつて魚が大變に傷むので自然雑喉場に行つても値を叩かれて損をする有様で、明石の魚問屋ではこの魚を燒いたり、塩したりして上方の市場に上してゐた。此の魚を早く大阪の市場に出したらと考へ抜いた翁は痛切に汽船が一隻欲しくてたまらなくなつたが、なか〳〵汽船を買ふ程の大金は當時の林兼では出來ない。翁が米相場に熱中したといふのもこの資金獲得したさからの一念であつた。その中、小蒸氣船に使つてゐる汽罐を押送り船に据付け、汽船と和船の合ひの子のやうな船をこしらへようと、或は縦汽罐に、或は横汽罐にと種々工夫研究を重ねたが、生魚運搬船として成功しないので途方に暮れてゐる中、横山某が淡路島通ひの百噸ばかりの小汽船淡路丸を有してゐるのを種々工面して之を借入れ淡路の漁場を廻つて漁獲物を集め、野〆にして、生洲に積んで淡路丸が曳船して大阪の雑喉場に送ることにした。運搬用の汽船を曳船に利用した日本最初の試みであつた。

當時明石、淡路から大阪に向ふ押送り船は早朝に船出しても、雑喉場に着くのは午後二、三時頃であつたが、此の新方法にまると結構大阪雑喉場の朝市に間に合つて、潑剌たる生魚を大阪人の食膳に上すことが出來るので、「これは素的な明石の活物(いけもの)ぢや」と大歡迎されて、四、五割もの高値で飛ぶ様に賣れて莫大な利益を得た。殊に荒天の日などは押送り船は全然駄目なので淡路丸の獨壇場であつた。しかし折角の林兼のよい思ひ付も五、六年の後には皆が眞似てしまつたのである。

第三章　活躍時代（一）

一、發動機船新生丸

（一）新生丸の誕生

國運を賭して戰つた日露戰爭も大捷に終り、勝つた〳〵で世間は大景氣である。その明治三十八年大阪に開催の博覽會見物に出た翁は、織るが如き人馬の往來する橋上に立つて何心無く河上を眺めてゐた。水の都の四通八達した川筋を縫つて狹い程に去來する和船の間をポッポッの巡航船が細い煙を吐いて走つてゐるのは大阪人にもまだ珍らしい頃であつた。この發動機船に好奇の眼を輝かした翁は、次第に吸付けられる樣に熱心にみいり、それから以後は發動機の研究に氣も狂はんばかりに熱中しだした。其の頃日本では發動機の製作所なく、巡航船に据付けられてゐたものもアメリカ製のものであつて、簡單な機械であり乍ら操縱不馴れ

のため毎度故障勝で、修繕も困難な狀態であつた。

一つ獨特の發動機を作つて運搬船に据付けてみようと思ひついた翁は、一度決心したからには成功する迄は中止することを知らぬ氣性である。考案に考案を重ねた結果を大阪の牧田鐵工所に注文した。牧田鐵工所ではこれまで製造した事のない發動機のことゝて製作に自信がない、そこで同業の清水某に之を振向けた。

この清水は裏長屋の見窄らしい一鍛冶に過ぎなかつたが、變人とまで云はれる程發明家肌の男であつた。牧田も清水なら仕遂げるであらうと下請させたわけである。その非常な熱心によつて翁が考案の發動機もとう〳〵仕上げることが出來船體も明石の小杉造船所の努力で出來上つたが、これを何うにも据付けることが出來ない。仕方なく大阪の木津川にあつた金指造船所に依頼してやつと竣功した。

此の間一ヶ年に亘る間、苦心慘澹、一方ならぬ生みの惱みを重ねて、

「それ見よ、中部は變なものに熱中して、可愛想に氣狂になつた」

と嘲笑され、冷眼視されたが、而も翁の心中には漸く會心の笑が漏らされてゐ

たことであらう。日本最初の十二馬力の發動機船第一新生丸がエンヂンの爆音も勇ましく、木津川の波を剪つて颯爽と見事な試運轉を行つたではないか。而してこれこそ翁の活躍時代に入るべき一新時期を劃する第一の產聲であつて、明治三十九年翁の不惑後一年であつたのである。

日本最初の發動機船は一魚問屋の翁によつて斯くも登場したが、無論遞信省にもその取締規則が無いから、遠洋に出るために「帆船補助機關第一新生丸」として許可を申請したに對し、當局では汽船にせよとか、發動機船規則は其の中に決めるとか云つて埒があかない。結局遞信省でも扱方が無いので、許可することも出來ず、認可するわけにも行かないが、發動機を取附けた第一新生丸を一年間位試みに運轉してみよと云ふことになつたのである。その運航後の結果が上々であつたのは言ふまでも無い。

數年の後、大分縣臼杵町の問屋から大阪の雜喉場問屋綿末への押送り船が發動機船に變つた、之が日本での第二番目で、それから以後は續々とこの發動機船が

出來たのである。

此の形勢を觀取した一辯護士が一日翁を訪ねて、

「貴方の考案された發動機に特許を得られたら、特許料が一隻について二、三百圓は取れるから、政府の特許權を獲得されては……」

と極力勸めたが、翁は

「それは有難いが、私は魚屋である。若し特許料に目がくれて本業に身が入らずお留守になつては……」

と、辯護士の勸奬に應じなかつた。

「發動機船を造りたい人は私の方のものを眞似ても構はない。それが世の爲人の爲になり、又不便な押送り船よりも發動機船をつけた船が澤山に出來て業界の爲になることが出來れば結構である」

と、其後も特許の勸誘には一切介意しなかつた。後年翁は

「發動機の進步に就いて、一中部が若し聊かなりとも貢献し得たところがあり

としたら、私の満足之にすぎるものはない」と、常に人に語つてゐた。

（二）朝鮮漁場乘入

世に死線を越えてといふ言葉がある。第一新生丸が日本最初の發動機船として誕生したといふものゝ今から思へば不完全極まるものである。その上乘組員は船長の翁、長男兼市その他二人で都合四人のいはば船乘の素人許りである。これほど大膽なことはない。此の船、この乘組員で遠洋まで航行するのだから死線を越えたのは何回であつたかわからない。

明治三十九年から四十年の春にかけての、或時、丹後の舞鶴地方に非常に鰤が豊漁だと聞いた翁は、早速長男兼市を機關長として明石から下關を廻つて日本海に乘入れた。折しも日本海は未曾有の大荒れである。蕞爾たる第一新生丸は木の葉の様に翻弄せられ、漸くのことで島根縣濱田の港に避難することが出來た。みると何十隻とも知れない無數の船が避難してゐる。其處へ小さな船が着いたので驚愕したのは船宿の客引で

「よくもこんな小さな船でこの荒天に來られたものだ、全く命拾ひとは此事である。天候が回復する迄是非泊つて行きなされ」

と、勸めたが翁は舞鶴へと急いでゐるので天候にかまはず出帆して、丹後の北端の伊根に立寄り其の翌朝無事に舞鶴に入港した。下關出帆後實に七日目である。同日に下關を出た他の二隻の汽船は一ヶ月目にやつと舞鶴に着いた位のしけ續きであつた。

其頃は海圖を使用することを知らない時代のことゝて、廣い海上を然も荒天に手搜りの航海を續けてこの好成績をみたのであるから、第一新生丸の得意は察すべきである。鰤で一稼ぎして、福井縣小濱を根據として、兵庫縣津居山方面にかけて鰈の買付けに着手したが、この時も日本海は大荒れで折角雇入れた水先案内も逃げて仕舞つたので、詮方なく水先案内の無い第一新生丸を護つて、東に西に

活躍した翁は、こんな大時化で魚のない時とて可成儲けたのであつた。

かくして試練の日本海乗入れは苦しい中にも好成績を收めて、少からぬ體驗を得た翁は直ちに其の足で朝鮮行を決心した。これには長男兼市も驚いて一度下關に引返してからにしようと强硬に反對したが、どうしても翁はきかなくそれなら我子ながら勝手にしろといふので油差しを機關長に任命して朝鮮行の陣容をこしらへて了つた。其夜は美保關に泊つて翌朝は好天氣である。幸先上々々なりと喜んだ翁も働かぬからには悴とて飯は食はせぬと云ふ次第で前夜からお櫃を隱して了つた。飢に耐へられなくなつた兼市が波穩かになつてから這ひ出してお櫃を搜し廻つたといふ挿話さへあつたのである。

美保關を出帆した翌日の夕方に對馬の豐洲の磯に出て、今度は北に針路をとると又同じ樣な磯が現はれた。不慣れな方面の航海ではあるし、日も暮れかゝつたので萬一の危險を慮つて假泊した。待兼ねた夜が明けて東の空がほの〳〵と白むと、今まで對馬とばかり思つてゐた磯邊には白衣の人々が忙しく往來してゐるではないか。變な所と思つてゐるとそれは朝鮮九龍浦であつた。これから浦傳ひに南へ〳〵と方向を變じて其の日の夕方に釜山に着いた。かくの如くにして日本水產界の最先端をきつた朝鮮漁場開拓の第一歩が林兼の第一新生丸によつて印せられたのである。

（三）航海受難談

朝鮮への第一歩を開拓した明治四十年の春未だ寒い頃、第一新生丸は釜山に着いて羅老島の鱧（はも）買に回航した。讃岐津田、下津井、山口からも鱧釣も來てゐたし內地からの鱧船も來た。第一新生丸は其處で鱧を買入れ大阪への運搬を開始した。

當時は一般に帆船で魚類を運搬してゐたのだが第一新生丸は發動機船だから大得意である。しかし遠い大阪へのことであるし、殊に生洲は始めてのことゝて萬事に注意したが、鱧は途中で斃死して了つた。物に屈せぬ翁は早速尾道で賣拂つて直ちに朝鮮に引返し斃死の理由を研究して二度目からは豫定通り成功した。斃

死の理由は、鱧を一定時間放養して置いて耐久力をつけてから船に積込めばよかつたのを知らなかつた爲であつた。

第一新生丸が鱧の運搬に先鞭をつけて成功したことを耳にした讃岐の商人連は組を作り、小富士丸を曳船として、押送り船で運搬を開始した。其の後二年程で騒亂のため麗水に根據地を移し商内を續けた。

明治四十五年、例の翁の船長、長男兼市が機關長の第一新生丸は雨の降る日も風の日も玄海灘の荒浪を越えて朝鮮行をしてゐた時代の或日のこと、羅老島から玄海灘を越えて下關に歸航の途中、羅老島を出帆する際機關に少し故障があつたが、積荷の關係と田舍の同島では修繕が充分出來ないために少しの手入を施して出帆した。

航海を續けてゐる中に機關の具合が段々と惡くなつて瓦斯が漏れる。機關長格の兼市は甲板に上つたり、機關室に下りたりして憩ふ暇もない。波の高い玄海灘ではあり、日は暮れて風は物凄く吹きまくる。小さな船體の第一新生丸は木の葉の様に翻弄されて全く生きた氣持がしない。船長室で舵を取つてゐた翁はふと頻繁に甲板と機關室との間を上下してゐた兼市の姿が甲板に見えない。これは可怪しいと思つた翁が直ちに機關室に下りて見ると兼市は早や虫の息になつてゐるではないか。機關を守つて修繕してゐる中に瓦斯のために窒息したのである。これは大變と物に動せぬ翁も冷汗が背筋を流れた。

夜は更けてゐるし、何一つ救急の設備のない大洋の眞中の小船の機關室では如何とも仕方がない。あゝ取返しのつかぬ事をして了つた。いくら事業の爲とはいへ、年若い息子迄犧牲にしようなどとは夢にも思はなかつた。あゝすまなかつたまたもしそんな事でもあれば御先祖に對して申譯もないと一心に神佛に祈願をこめ、誠心こめて看護した甲斐があつて、神様の恩寵と云はうか、佛さまの慈悲と云はうか、此の世の人とも思はれなかつた兼市は危い所で一命を取止めることが出來た。翁も此の時ばかりはこんなあぶない事業は斷然放棄しようと一度は決心したものの、併しこれしきの事に挫折しては大事業が完成出來るか。濱一番の仕

事師と謳はれた父の顔に對しても申譯がないと思ひ返し、更に勇氣百倍して朝鮮へ〳〵と目的完遂に邁進し續けたのは、流石に翁の不屈不撓の偉大さであつた。

（四）無鐵砲な奴

朝鮮乘入れの以前土佐の津呂、室戸方面にめじか（鰹の一種）と鯖との買出しに出かけた翁は、室戸から甲浦に向ふ途中太平洋の荒波に加へて、強い東風に煽られ九死に一生を得た苦勞談等數へるに暇がない。

第一新生丸で朝鮮に往來してゐた頃は未だ海圖等も使用しない手搜りの、惡く云へば行當りばつたりの航海である。或時の大時化の爲め對馬の竹敷の要港地帶に迷込んでゐるのを知らずに假泊した。時は日露戰爭後の國防强化の重大時局である。忽ち要港當局の眼にかゝつて取調べられた。

「日誌を見せろ」

「免狀を見せろ」

日誌があつたりする完全な船でないことは勿論、免狀なんかもありそうな筈がない。取調べに當つた海軍當局はすつかり翁達を間諜と睨んで乘組員全部を奥の一室に連行した。翁は事情を詳述した所が、

「明石にはそんな船はないぞ」

「此所を何處と思ふ。外國に秘密の竹敷要港であることを知つてゐるか」

これは大變、ひよつとしたら歸して貰へないかも知れないと觀念してゐると一時間ほどしてから、

「もう歸れ」

「こんな無鐵砲な奴は又と二人世の中にあり、やしない」

と云はれてやつと安堵した。

（五）窮通打開の途

第一新生丸に次いで第二新生丸も出來、林兼商店も昔の押送り船時代とは隔世

の感がある様になつた。朝鮮の鰹の時期も過ぎ鰆にかゝるには暫く間があるので秋の漁期を目指して翁は、西の朝鮮から東のはての青森の鮪大敷を當込んで乘込んだ。丁度當時青森で飛ぶ鳥も落す勢の大阪の小高屋と一緒に落合つたが、小高屋が萬事大名式で宿屋は一流で日々豪遊を續けてゐるに引替へ、翁は木賃宿で商賣に勵んでゐたので、宿屋の者も馬鹿にしてゐた所が、屢々電信爲替で大金が送付されるのでこれはと女中迄も驚き急に慇懃な待遇になつたといふことなどにも翁の一面目を知るに足るであらう。

明治四十四年となつて次男謙吉も成長して翁の代りに買出しに出掛けた頃の或時のこと、第一新生丸が數日間消息不明になつたことがある。買付けの魚は多いし氣に病んでゐると十七、八日目に漂流してゐるのを隱岐汽船に救助され、山口縣の大浦に曳航された。船體を同地の青年團が努力して浮揚させようとしたが中々揚らない。急報によつて日生丸で現場に急行した翁は、第一新生丸の損傷を調べてゐたが船底には故障なしと見て、早速有合せの石油罐の蓋を除けて割木を取附けて、鈎瓶の樣なものを十箇程作つて水を吸み出したら船體は造作なく浮上つた。

又或時は迎日灣から九里浦に歸る途中、夜十時頃不老岬附近で暗礁に乘上げたのを翌朝未明、潮を利用して救助した事や、羅老島の沖合半海里の所で船首を突込んだ場合も機關と魚艙に考案を加へて下關に引返したことなど翁は、凡ゆる場合によくその事情、原因等を研究して徐に方法を考案し、何事によらず少しの工夫をめぐらせば窮通打開の途はあるものと信じて善處した。翁の處生の道もこの信念によつて開かれたものであらうと思ふ。

二、發動機の製作

（一）發動機改善の努力

川蒸氣船から暗示を得て和船に發動機といふ日本最初の試みをした翁は、あらゆる世間の嘲笑を浴び乍らも第一新生丸を誕生せしめて、魚類運搬に一大革新を

齎らした。

然し飽迄研究心の旺盛な翁は、第一新生丸が出來て運航してゐる中に、どうも具合の惡い所がある。そこで考案工夫を重ねてゐる中、乘組中の咄嗟の思ひ付きで、艫(とも)を西洋型にして、中央を和船型にする樣な設計圖を半紙二葉に描いて、大阪の金指造船所に註文した處、「出來ない」と斷るのを再三再四交渉して結局作らせた。これは全く翁の獨創のものであり、これなら魚艙もうまく出來るし、萬事好都合なので、現在「明石型」として利用されてゐると共に、農林省制定の標準型もこれに外ならないから愉快である。五、六十噸のものを理想とする。

翁と發動機との關係は即ち漁船發動機の發達史である。幼稚な電氣着火時代から、有水輕油時代、無水輕油時代を經て現代の無水重油時代に及んでゐる。この間の翁不斷の努力の蹟を見よう。

先づ最初は電氣着火を入れて成功した翁は、次で吸入瓦斯發動機に變更したが之は充分にうまく行かなかつた。

明治四十五年、神戸發動機製作所が日本最初の有水發動機を造り、紀州の金生丸に二〇馬力を取附け、明石海岸で試運轉を行つたのを見學した翁は、朝鮮近海で使用する生船に入れようと神戸發動機製作所に二〇馬力三台を註文し、電氣着火であつた第三新生丸に一台、第一新生丸に二台据付けた―所が大成功だつたので、直ちに翁は日本で誰も試みたことのない六〇馬力のものを第五新生丸に据付け素晴しい成績であつたので、矢繼早に海洋丸に八〇馬力のものを据付けて成功した。この一頃は神戸發動機製作所は林兼の專屬工場の如き感があつた。こゝにも充分の將來を見越して、斷乎として邁進する翁の一面目を見得るであらう。

(二) 彦島造船鐵工所

大正七年翁は彦島に林兼造船鐵工所を設立して發動機の製造に乘出した。當時の發動機は全部有水式發動機であつた。水は無償であるからこれでも差支へないやうなものゝ、一旦遠洋に出て水が無くなつた場合にはどうするか、又小さな船

では水を入れる場所を設けるのも惜しい。この不便を除くため翁は、彦島造船鐵工所を創設するや否や、燃燒機タラカンの研究を始め、一箇年後にはシリンダーによつて水を使用しなくてもよい無水式の研究の完成を見るに至つた。手始に二五馬力無水單氣筩エンヂン一基の製作を漸く成功したが、尙も作つてみたり、壞してみたりして研究を繼續してゐる折柄、鳥取縣賀露に小型手繰船に外國製エンヂンの立派なのが据付けてあることを耳にした翁は早速技師と共に調査に出かけた。それは瑞典ボリンダー會社製二五馬力セミ・ディゼルで頗る完全なものであつた。これからヒントを得て瑞典製に聊かも遜色のない無水式四〇馬力セミ・ディゼルを完成したのは大正十二年のことであつた。この頃神戸發動機製作所では瑞典スカンヂヤ式エンヂンを製造してゐたが、何れも外國の模倣で失敗つゞけの際であつた。この翁の無水式研究の完成を聞いて遙々技師連が見學に來て大いに啓發された樣な歷史談もある。

彦島造船鐵工所創設の當時は輕油は高い上に不足してゐる時代であつた。翁は

重油使用の必要を痛感し、船員に對して油一罐幾許といふ手當迄出して重油の使用を研究し、大正七年重油使用による無水發動機の專賣特許を獲得した。翁の專賣特許をとつてゐる關係もあるけれども、一般に重油使用の得策なることを認識せず、漸く五、六年後になつて重油使用が始められたのであつたが、「世間の爲になるならば」との翁の奉仕の精神から間もなく專賣特許を開放した。

翁の發動機の研究に當るや、常に自家用の必要より工夫考案し、絕えず眼を一歩先につけてその完成を見るまで止まなかつた。有水式の不便の痛感より無水式を生み出し、修繕費の節約と、機械の壽命を延す一擧兩得の結果を得、高い輕油を廢して重油使用の研究に成功してゐた爲、日獨戰爭當時の不況時にも一箇年に二十八萬圓の油價の節約を來すことが出來た。

三、朝鮮漁業の啓發

(一) 苦心慘澹

第一新生丸に一生の運命を托して、翁が朝鮮進出の第一歩を踏出し、羅老島を根據地として活躍を初めたが、後慶尙南道の方魚津に移した。

大正四年九月、翁は方魚津に本部を置いて九龍浦、二加里、七里浦及江口を漁場として、先づ播州室津、小豆島の縛り網や巾着網十統程を仕込み、別に巨濟島へ內地から鯖網の來たのを買付けた。愈々これから仕事にかゝるといふ段取である。その年同地方に於ける鯖の建方を翁の考案により函建、簀建と改めたのが現在まで續いてゐる。

實際の指揮は次男謙吉、女婿悅良が擔當したが、不運にも九月の漁期から十一月中旬まで一尾も獲れないと云ふやうな慘澹たる狀態であつた。不漁のため漁夫には仕込金の外に、食料や別に金錢迄貸さねばならぬといふ始末である。折も折とて方魚津には虎疫が大流行し、其の罹病者は殆ど漁業者許りである。魚が獲れないから運搬船は大欠伸である。其時の損害は十萬圓と云ふから當時の林兼としては並々ならぬ大痛手である。翁は謙吉、悅良を始め主任連中と、十一月中旬以後に今一度漁を行ふか、この儘引揚げるかの大評定を凝した。同地方に出掛けてゐた同業の山神組や、其の他の連中は既に全部引揚げてゐる際でもあり、色々と議論が出たが、結局翁は例の氣前で男一匹の度胸試しと最後迄頑張ることに決定した。

其の中に虎疫も漸次に終熄して、秋晴れの好天氣となり、漁況漸く好調に進み十一月廿日頃より北から鰺、鯖、鮯(ハマチの小さいもの)等が旺んに廻遊して來て、二統で十萬尾も漁獲すると云ふほどの景氣である。第十一、第十二、第十三第二十三の新生丸は漁獲物を滿載して江口、榮德に陸揚するといふ狀態の大漁が廿日間も續いて非常な大儲をした。

網方には網十統の仕込金七十萬圓を差引いて、三萬圓をも與へて歸らしたので

其の喜び方は大變なものであつた。翁は此時より仕込制度はつまらぬ。同じ危險を負擔するなら直營主義にすべきものであると考へた結果、以後縛り網巾着網の直營方針に進む樣に決めた。

翁は常に人より天運によるものだと稱せらるゝを非常に嫌つてゐる。然し翁の乾坤一擲の大奮闘には天も感應した場合が度々あつたのを忘れてはならぬ。

（二）創案の鰮巾着網

普通の巾着網では大漁があると漁夫の前貸が多くなり、又漁夫の不足を來すことは必然であるから、こゝに翁は機船利用を思ひついた。普通なれば七、八十人から百人位乘組むものが機船巾着網なれば七、八十人から五十人位迄減じられる。現在では三十人位で操縱してゐる。

又同じ巾着網にしても、其の後三年間位も一統で、片手廻しが良いか、兩手廻しが良いか考へたが、どうも兩手廻しでは仕事が困難なので、片手廻しテーブル式といふものを考案した。併し依然巧く行かぬので、二隻で競爭させて二箇年程改良に改良を加へて研究してゐる中、遂に優秀な成績を示す樣になつて來た。

其頃、山口縣の水產試驗場の仙鶴丸が片手廻しをしてゐたが、林兼の魚生丸の片手廻しテーブル式を見て、

「仙鶴丸は片手廻しの特許權を有してゐるが、林兼がそれを眞似てゐるのは特許權侵害だ」

と云つて、特許料を請求して來た。翁は

「船の式が違ふ。私の方のものはテーブル式といつて、私の方で考案したのだから特許料は出せぬ」

と、即座に一蹴した。

翁の創案の巾着網の方法は漸次に普及し、今日朝鮮漁業の王座を占めてゐる北鮮の鰮巾着網の濫觴となつた。續いて巾着網大敷網にも着手し現在三十余箇所迄も經營してゐる。

（三）機船手繰網

朝鮮の手繰網といふのは實際に手で繰る網のことである。翁は土佐に於て鮪延繩漁業に使用して失敗したものを朝鮮に廻し、巨文島で朝鮮最初の機船漁業を初めた。これが現在に操業してゐる手繰網である。

日本人の先鞭をつけた翁も、當時、朝鮮に於ては手操で獲れる魚類は非常に安いので一時中止した。一つには經驗に乏しい事にもよるが三漁期續けて失敗した。其頃、朝鮮人はバッシ網か、繩舟等の至極舊式な漁業をしてゐたぐらゐであり、內地からは讃岐の鰆流し網や、鱧延繩が通漁してゐたに過ぎなかつた。

翁は又古船を買込んで、朝鮮人に鯛や鱧の延繩船をやらせたのが、これも朝鮮で着手した內地人の最初であるが、追々之が旺んになつて今では七分迄朝鮮人が從事する樣になつて來た。

翁は方魚津で大正聖代の末葉頃まで血みどろになつて働いた。單に漁撈のみではなく、鐵工造船所、商事會社、漁網會社、自動車會社より電燈事業をも興して此地の發展に不尠盡力した。もと一寒村であつた方魚津も林兼が活動を開始してから、めき〳〵と繁榮して邑に昇格した。盛漁期には人口參萬に上ることがある。翁の卓見にして度量が大きく單なる自己の利のみを追求せなかつたことは、自動車會社が十ヶ年も無配であつたことでも判るであらう。同地の人々は翁の德を稱へ、昭和三年頌德碑を立てゝ永遠に翁の功績を彰した。方魚津のある限り翁の芳名は千載に薫るであらう。なほ別項「方魚津と翁」の條に記述する。

四、朝鮮農場の開發

世々漁を以て家業としてきた翁も、若しも漁業に失敗した場合に、船員なり、商店の從業者、其の家族の艱苦するのを慮つて萬一の場合には農業をといふ立場から、大正四年慶尙南道金海の水田三百五十町歩の未開墾地を買付けたのを手初めに、蔚山、東萊、慶州方面と次々に買取り、昭和五年に木浦で壹千町歩を買入

れ、本年も七十町歩を買ひ足した。現在では二千町歩以上を內鮮人に小作させてゐる。

最初の買附が未開墾地であるから、水害もあり、植付にも困る。內鮮人に小作させてゐる中に、溜池と水路との完備を期することが急務であると感じた。大正九年翁は慶尙南道會議員をしてゐたが、農產物改良は幾度か道會の議論となつたが、名案も生れず、一應實地を視察することになつた。實情を視察して水路の必要を痛感した一同は、廣く日本各地の模範農場の開墾狀況を視察しようと一決したが豫算なき爲中止となつた。

翁は「先づ机上の議論より實行に入らねばならぬ、それには內地から模範指導員を招聘してはどうだらう。それならば及ばず乍ら經費の一部を寄附しよう」と申出た。

かくて、農場經營の經驗者であり、大隈侯からも推奬されてゐる養子中部義吉の實父金井鐵次郎氏を模範敎師として內地から招いて、翁年來の持論たりし農場開發の第一歩が始められた。

更に慶尙南道知事佐々木藤太郎氏の盡力により、翁は金井指導員と共に慶尙南道各地に出張し、指導員は金棒を深く地下に突込みて調査し、その地味に適應する肥料を研究實驗し、土地の狀況、土質等を詳細に調査した結果、或地方では天水のみに依存することは全然不可能で、溜池や水路が必要であるのを確認するに至つた。

大正十二年、時の朝鮮政務總監有吉忠一氏に道會の意見を齎らして折衝した結果、七、八年計畫で一億二千萬圓の豫算で溜池と水路との完備を圖らうと云ふことになつた矢先に、總監が更迭した。朝鮮農場開發には何を措いても、この事は實行に移さねばならぬと、確固たる信念を有する翁は、後任の總監下岡忠治氏に一再ならず會見を申込んだが、好機なくして空しく月日を經過した。

一日翁は下岡總監の東上と同車するを得て、下關から寢台車內で、折柄病中の總監を訪問し具に朝鮮農事開發の急務を述べた。總監亦頗る熱心で深更十二時を

過る迄意見を交換した。翁との會見中、病總監はポケットより散藥を取出し、一度ならず二度まで呑まれたが、その後再び起たず朝鮮の地を踏まれなかつた。斯様に下岡總監も翁の意見に共鳴して、農場開發には總督府から三割の補助をすることゝなつた。三割では地主が堪へられぬので結局五割に增額されることゝなつた。

「日本は米を外國から輸入する必要はない。朝鮮米收獲高一千三百萬石を二千萬石にするには何の苦勞もない。二千萬石は愚か、少し手を入れたら二千萬石突破は夢でない。朝鮮米增收は溜池と水路との完備にある。」

とは、翁の當時よりの主張である。

朝鮮でも時代の風潮は爭へず、小作爭議が頻發し、翁の農場でも或年、小作人が大擧して來たが、それ以前より翁は年により作に良、不良のあるのを慮つて、大敷の綱の藁で繩を作らせる等出來るだけの副業を與へてゐたので、小作人も翁の說得を諒解したといふ話もある。宇垣總督も或時の小作爭議對策協議會の席上

翁のこの意見發表には少なからず共鳴された由である。

翁はかく手廣く朝鮮農場經營を營んでゐるが、不斷に入念に資料研究を怠らぬから、水田購入に際しては何時も現場を見ずして買入を行つたけれども、未だ一度も失敗したことがないといふ。

五、南支、台灣漁場調査

翁はまた早くから南支、台灣方面の漁場調査にも手をつけてゐる。

大正二年、現林兼商店常務取締役中部悅良（當時は安居院悅良といふ親戚の青年であつた）現朝鮮開發株式會社常務取締役中島爲一氏と相謀つて、支那東海より南支に亘つて漁場を開發するために、千五百噸のトロール船に母船手繰をつけて現場に向はせた。又或時には東京灣漁業を企業化すべく計畫を進めたこともある。南支漁場調査の二度目には、第四〇、第四三播州丸を差向けて二ヶ月に亘つて試驗した結果、千四百箱の漁獲物を得た。越えて大正十四年には台北州の委託

をうけて台灣近海漁場調査を行つたこともある。

翁と南支、台灣方面漁場開發の因縁はかなり深いものがある。

六、蘇聯沿海州沖取漁業

日本が莫大な國帑と尊い幾十萬の犧牲を拂つた結果として露領出漁の權益を獲得した日ソ漁業條約も、毎回の改訂毎に横暴なるソ聯當局は日本の權益縮少を謀り、彼我の交渉に順調な進行を見ることは稀であつた。昭和八年も例の如く、同條約の改訂が大變困難であつた。そこで翁は一つには、日本漁業家の意氣を示し、また一つには、かくの如き方法もあるものとソ聯への懲らしめにもなり、條約改訂を我方に有利にすべく考へついたのが、露領沿海州漁場の全面に亘る公海で、鮭、鱒の沖取流し網といふのを行ふ方法である。

乃ちソ聯の陸上や、陸に近い漁場で鮭、鱒を獲る以前に、文字通り沖合で流し網で漁獲してやらうと云ふ魂膽であつて、しかも公海だからソ聯からは一言の文

句もあらう筈がなく、此方の自由に鮭鱒は獲り次第であるから、うまく成功すればこれ程好都合はないのである。

翁はそこで、諸種の統計を集め調査して見ると、充分に事業化の見込があるので、愈々具体的に計畫を樹てゝみた。翁は完全に自信があり、確信も充分出來てゐたのであるが、一般人は少からず危惧し、殊に水産界の先覺者であり、その方面の識者として有名な伊谷大日本水産會長ですら

「あなたの方で經驗があるならば兎に角ですが……」

との澁つた挨拶である。

併し翁は意を決して、斷然實行した所が、その成績は上々吉であつた。元來、翁の主義は自己の爲のみで無く、他人の爲になることである様な場合にも該事業を獨占しようと云ふやうな、狹量な考へは全くないので、その翌年、來るものは拒まずの主義から同志を集め、鮭鱒の沖取合同株式會社を創立した。

斯くて三、四年操業を繼續する中、陸上よりも沖取の方が旺んになり、ソ聯の

横暴を牽制することに於て翁の目的は着々達成されたが、同時に一大脅威を蒙つたのは、日魯漁業株式會社であつた。結局農林省の斡旋等によつて遂にこの沖取合同株式會社は日魯漁業株式會社に合併されることになつたのである。

翁はまた、北千島方面でも同様に流網を行つたが之も大成功であり、露領陸上と、沿海州、北千島の二つの沖取と都合三つで、北千島から露領にかけての我が漁獲物は、一時恰も三等分されたやうな形であつた。かく盛況を呈した北千島の沖取も日魯に合同されるの餘儀なきに至り、殘りは北千島の陸上のみであるが、やがては之も合同に進むであらう。翁としては孰れも多大の犧牲を拂ひ、大決斷によつて敢行され、愈々これからといふ所で無理强ひに合併させられるのを甚だ殘念にも思はれたが、その心中に懷抱する所は唯一己の利害のみでなく、天下國家の大處より欣然と應ぜられたのである。

其の後、翁は東カムチヤツカで流網による鮭、鱒を冷藏運搬で送り、紅鮭は青森の大東罐詰會社で罐詰として海外に輸出し、國際貸借の改善に貢献してゐる。

七、冷藏庫と小型冷藏船

冷凍魚が喧傳され出したのは極く最近の事である。先年葛原冷凍株式會社といふものが生れて、大仕掛で冷凍魚といふものを始めたが、惜しいかな間もなく失敗して了つた。

國民の認識不足の爲めだつたにも因るが、四面環海の日本では此種の事業は成功しないであらうとの說をなす者さへ現れたが、併し冷藏庫や、冷凍船が不必要であると云ふわけではない。只其の方法の研究が不充分であつたから失敗し續けたのである。

翁が彥島冷藏庫を設立したのは大正九年のことである。彥島冷藏庫の設計は瑞典から招聘した技師の手になるブライン式冷凍機であつたが、或時フライ・ホールが破裂して多數の負傷者が出來たやうな大椿事があつた。其の上、冷藏庫內に入れてあつた無數の鯛が、腐つてしまつて捨場に困つたこともあつた。

共同漁業株式會社が冷藏庫に着手したのはそれからずつと後のことで、當時は翁の企を冷笑してゐたものである。

かうした苦い經驗を嘗めたが、瑞典技師の指定した温度を守つてゐたのだから斯くの如き失敗は無い筈であるのに、何故前記の如き事があつたか、其の原因をよく探究して見ると、日本の氣温の關係を無視した西洋人の設計である爲であつた。冷藏庫のみならず、冷藏船にしても外國人の設計によれば、大型のものでないと出來ない。葛原冷凍株式會社が二千噸の大型船を使つて失敗したのも、日本の氣候の實情に即せざる米國式そのまゝで、萬事外國技師に依存してゐた禍であつた。

翁はこゝに於て、冷藏船は小型で、冷藏庫と併行してやらねばならぬものであり、冷藏船は二百噸位の小型のものが適當で、又缺くべからざる條件なりとの結論に到達した。

そこで最初に建造したのが百四十噸型三隻、次いで第十、第廿二、第廿三、第

廿五の播州丸が出來た。現在では冷藏船により朝鮮の魚類を内地に送り、又船内急速冷凍法により冷凍工船内で冷凍する迄に進んだ。

かく冷藏庫なり、小型冷藏船の今日の發達を見る迄には、先覺者の艱苦な歩みがつゞけられたことを忘れてはならぬ。農林省でも斯業の發達と、漁村の進歩に資する爲め、冷藏設備奬勵に多額の補助金を交附してゐる。林兼商店としても之による庇護は大であつたにしても、尙、翁は莫大な犧牲を拂つてゐる。殊に最初に建造した二隻の冷藏船が青森から下關に向ふ途中、トツプ・ヘービーにかゝつて建造後二年目に轉覆して、乘組員も、荷物も海底の藻屑と消え失せたのは忘れ難い大損害であつた。

貴い經驗に經驗を重ねた結果、林兼商店は今日の非常時局に際し、中支・北支南支に亘つて新鮮そのものゝ冷凍魚の配給に萬全を期し、帝國發展の爲めに、銃後の力强い奉公に盡力しつゝあるのは、蓋し翁としても滿足であらう。

八、南氷洋の捕鯨戰

（一）準備時代

鰯網を曳くのも漁業なら、山のやうな大氷山の流れと鬪ひ乍ら一頭が百噸以上もある大鯨群を逐うて、世界の捕鯨業者が南氷洋上に活躍する國際大捕鯨戰も漁業である。

鯨潮吹く熊野灘と云ふ言葉がある。太平洋をうけた紀州は海が荒い。紀州や土佐では鯨が獲れ、隨つて、此地方の漁業家は捕鯨技術にも長じた、鯨獲りの名人も輩出するが、大きい視野からすれば、此等は謂はゞ沿岸漁業に過ぎない。漁獲高も知れたものであり、無論、國際貸借の改善に資する樣な事も有り得ない。

鯨に關係の深い土佐の資本家と、漁業家を中心として生れたものに土佐捕鯨株式會社と云ふのがある。大正七年、翁は勸められて同會社の過半數の株を買收しその經營の實權を掌握するやうになつた。

當時、露領ポセット灣方面が出漁に有望だとの經驗者の談を容れ、翁は、白露政府の許可を得た上、日本捕鯨事業の先覺者である志野德助氏が船長として乘組んだ福志滿丸を沿海州に出漁させた。所が不運にも、翌年白露政府が轉覆して赤露政府と變るや、福志滿丸を浦塩斯德に抑留し、鑑札を沒收してしまつたのである。翁は、正當政府の認可をうけたものを、あまりの横暴な仕打に憤つて、正式裁判を仰ぐ肚であつたが、その費用を送金する途もない。結局無斷領海侵犯の廉で、赤露裁判所で罰金を言渡されて、此の事件は大失敗大損害を蒙つて終結した。

株主は株主で、この上の拂込はして呉れぬ、土佐捕鯨株式會社は假死狀態を續けて數年を經過したが、捕鯨事業の前途有望なのに確信を有してゐた翁は、會社の更生策として、同じく捕鯨事業の經營をしてゐる大東捕鯨株式會社を買收して土佐捕鯨に合併した。その結果、僅かに一隻のキャッチャーしか持つてゐなかつた土佐捕鯨株式會社は大東の御蔭で、所有船は急に四隻となつた。翁の計畫は見事圖に當つて會社の業績は見違へる樣に好轉した。

（二）捕鯨事業の有望性

月日は流れて昭和五年になつた。志野德助氏は土佐捕鯨會社の重役であつたが我國捕鯨界の第一人者として選ばれ、日本代表として瑞西ジュネーヴの國際捕鯨會議に出席した。其の序を以て、世界に於ける捕鯨事業に關する詳細なる調査を遂げて歸つた。其の結果、南氷洋に於ける捕鯨事業の有望性を語り、三十餘年に亘つて日本漁業家が折角磨き上げた捕鯨技術を、南氷洋上の檜舞台にぜひ登場させなければならぬ樣に、運命づけられてゐることを痛切に感じた。

歸來、氏は翁に對し、林兼商店の主腦部に對して熱心に南氷洋征服を進言し續けた。

當時の南氷洋上に於ける捕鯨事業の概況を諾威政府當局の調査によれば、世界各國からの出漁船は、母船三十五隻、キャッチャー二百八十六隻で、捕鯨船の一獲期、即ち南氷洋の夏期に於ける鯨の捕獲高四萬頭內外、鯨油生產高は四十萬噸

から六十萬噸位で、これのみの價格を見積つても、一億數千萬圓の巨額に上る狀態である。

折しも日本の國情は、日支事變直前の文字通りの非常時である。わが國民は各々其の職務に於てあらん限りの全力をさゝげて、國家に奉公しなければならぬと痛感してゐた翁は、水產業者として盡すべき道はこゝにありと決心した。

（三）日新丸の建造

決心一度定まれば勇斷、速決の翁のことである。所が困つたことには完全な母船が一隻もない。經驗深い英國の造船狀況を見ても、又川崎造船所に相談しても建造に十五ヶ月以上も要するといふ見込である。それでは出漁の好機を逸するので、一度は落膽した翁も、「意志あれば方法あり」と熱心に、川崎造船所に交渉した結果、國家的事業なりとの觀點より、遂に建造を引受けるに至つた。しかし同船には主機は二台据付けないと不安であると云ふやうな專門家の意見である。

翁は熟考した末に

「操業の上からは一台より二台の方が萬一の場合には良いであらう。しかし二台据付け度くとも急の間に合はぬ、それでは建造に時日を要して出漁に遅れる。折角船が出來ても其の年の漁期の間に合はぬ様では役に立たないし、主機一台では全然いけないと云ふ理由はなからう。殊に主機一台の場合にはそれ丈け大事に取扱ふし、氷に觸れる危險も二台の方が多い筈である。又永久使用には一台の方が凡てに經濟である。」

と、斷然主機一台で結構であると言明したので、造船所側でも、よろしいと賛成して、萬事の手筈も速に決つて、昭和十一年二月二十六日に起工した。

爾來國家的責任觀念の強い川崎造船所の幹部並に技術員の、夜を日に繼いでの涙ぐましい奮闘努力に依り、驚異的超スピードの世界的記錄をつくり、二萬一千餘噸といふ日本一の無敵捕鯨母船〃日新丸〃は、同年八月一日、前川崎造船所社長であられた平生文部大臣を初め、遞信、商工、農林の各省大臣代理、其他多數の來賓環視の裡に、無滯晴の進水式を終へ、轟く祝福の歡呼を浴びつゝ、堂々たる巨姿を神戸港上に浮べたのである。

この船は總噸數一六、七六四噸、載貨重量二一、五七二噸、全長一六四米、幅二三米、深さ一五米、主機關川崎マン型二衡程複動噴油式デイゼル機關、軸馬力六、〇〇〇、最大速力十五節で、甲板の廣さ六百坪、二百噸の巨鯨三頭を引揚げて樂々處理が出來、一台六萬圓を投じた獨逸專賣の搾油機六基のほか、二萬噸の大油槽を有し、船首にブリッヂを造つた點など、本船の性能上注目を惹くものである。

竣成に日限の迫つてある日新丸の艤裝工事に、めまぐるしい而も入念の努力を續けられたのはいふまでも無い。起工以來僅に七箇月の、九月二十八日に一切の艤裝を完了した。これ全く勇斷進取の翁の氣魄と、川崎造船所の献身的奮闘に對して、神明の加護を與へられたに因るものであらう。

（四）國際捕鯨爭覇戰

南氷洋の國際捕鯨爭覇戰には、此の道の先進國たる英、諾、獨、丁等の各國が目覺しい活動をしてゐる其の眞只中へ、我が日新丸は兼て大阪藤永田造船所へ註文新造してあつた捕鯨船八隻を伴づて、昭和十一年十月七日華々しくも神戸港を出帆したのである。

大平洋を南下してジャバ海に入り、ボルネオを經て西濠州のフリマントル港に入港したのは、南半球の春漸く闌はならんとする十月二十九日であつた。この航海中は捕鯨網の準備、尾羽ワイヤーの製作、塩藏桶の組立等に忙しかつた一同も時々給水給油をなした八隻の捕鯨船の乘組員と共に上陸し、此の港が南氷洋に進む最後の寄港地であるので、愈々の戰鬪準備を整へて、十一月三日に同港を出帆した。

間もなく日新丸は所謂暴風圏内に入つた。南緯四〇度から五〇度位の間の六百浬程は、年中西風が吹いて時化通しである。漸くにしてこれを突破し、東風の海穩かな氷山地帶に入つた。一口に氷山といふけれど、東京驛前の丸ビル位のものはザラにある、一度永山に衝突でもしたら木つ葉微塵になつて了ふので、細心の注意を拂ひつゝ遂に十一月十三日愈々待望の南氷洋漁場に到着した。

こゝは世界の捕鯨船隊が覇を爭ふ凄絶、壯絶な場所である。何故こゝに鯨群が集るかといふと、氣候の關係上、硅藻類が夥しく繁殖する。それを餌として「ユウフオジャ」と稱する三・四糎の鰕が群生する。。この鰕を常食としてゐるのが鯨である。

南氷洋の春が近づくと、印度洋、大西洋、太平洋と八方の海から鯨の群はこの廣い極洋に集る。此の漁場は周回一萬浬もあらう。この廣い場所で、鯨群目指して集つた先進國の船と交錯して、八隻の捕鯨船は東に、西に活躍して、射止めた大鯨は㊗の「フライキ」を浮かし、次々と鯨群を追廻し、射獲り、母船の側は忽ち繫留の大鯨でとりまかれて了つた。

母船日新丸では三百數十名の乘組員が、今や大鯨が息を引取らんとする直前本船に引揚げ、四、五十糎程の刄物に、一米半位の柄の付いたものを振りかざして粗解剖にとりかゝる。一頭一時間か二時間位でこれを終へ、順次に次の粗解剖にうつる。

この日新丸はそれ自身が一大工場なので、それから肉は肉、骨は骨とそれ〴〵に適當に處分し、更に鯨油を製造するのである。

かくして製造した鯨油は、之を諸威の油艙船パイク號に積替へ、翌年二月一日國際貸借改善のため、直ちに歐洲に向つて出發せしめた。

日新丸はこの初めての一漁期に於て、捕獲頭數一一一六、製油量一五二八〇噸尾羽塩藏物三五〇〇〇貫と云ふ好成績を擧げ、三月中旬切揚準備を完了し、同廿七日フリマントル港まで出迎へた幸生丸に獲物を滿載し、一同は捕鯨船と共に四月廿二日午前十一時めでたく下關に入港し、直に檢疫を受けて上陸準備を整へ、午後一時中甲板に解團式を擧行し、林兼專務取締役中部兼市氏の挨拶に次ぎ、隊長中部利三郎氏は、隊員諸君の積日の辛勞を犒ふ感激に充ちた言葉を述べ、萬歲を三唱して半歲に亘る捕鯨壯擧の幕を閉ぢた。

併しこの勇敢なる國際捕鯨戰のかげに、惜むらくは氷海漁撈の尊い犧牲となつた作業部長志野德助以下四君の、名譽の戰死にも比すべき客死悲話のまつわつてゐることを忘れてはならぬ。

日新丸に續いて七箇月で第二日新丸が建造され、かくして林兼商店は世界の業者を向ふに廻して堂々と覇を南氷洋上に競つてゐるのである。

九、逸話斷片

（一）

第一新生丸で羅老島に乘込んでから三年の後、方魚津を根據地としたのが明治四十三年で、これより大正の末年までの翁の奮闘は實にめざましいものがある。

單に漁撈のみの指揮活躍ではない、鐵工造船所、漁網會社、自動車會社より電燈電力事業までも勃興させた。眞に能く働き、能く儲け、能く散じたのは翁の事で隨つて地方の發展に少からざる寄與貢献を爲したのはいふまでもない。

淋しい漁村であつた方魚津が僅か數年の間に素晴しく發展して二、三萬の人口を算するやうになつたのでも、その急激な繁榮ぶりを推知される。

儲かることは隨分儲かつたものである。儲かれば散じ易いのが人情である。土地の發展に連れて藝妓の五百人も居る所といへば朝鮮廣しと雖も、釜山、元山、方魚津のみであるといへば、方魚津の賑ひは想像が出來るであらう。その開拓者である林兼商店の儲けはたいしたもので、或時店の押入れを掃除してゐると、押入れの中のボロ紙のくるんだ中から、何んと大枚五千圓の札束がころがり出した。地方への送金を紙にくるんだまゝ忘れてゐたものだと後になつて判明したことがある。林兼の勢力の增大につれて、林兼の傳票があたかも堂々たる札ビラのやうに、地方の金券代用に大手を振つて通用されたほどであつた。

（二）

大正十一年頃のことである。長者番附といふ一枚刷が夜店の店頭や本屋で賣られたことがあつた。その番附によると、東の大關は先代の乾新兵衛、西の大關が漁業家の親玉で多額納税者の中部幾次郎となつてゐた。その頃翁の商店の或る若い店員が店の仕切金を使込んでゐることが發覺して解雇されたのをふくみ、出鱈目な店の五ヶ年間の儲け高を表に作つて明石の税務署に密告したのである。右の番附が流布されてゐる矢先のことでもあり税務署の見のがす筈がない。果して税務署から翁の申告した收益高を倍額にせよと返却してきた。支配人は之が爲に税務署に日參し正直に説明に努めたが署ではなか〳〵諒解しない。さうかうしてゐること約一年、こちらも税務署の態度に呆れて

「私の方の申告が少なければ、監督局に行つて説明致しませう」

と、翁は大阪税務監督局に行き局長に面會を求めた處、局長は外出間際であつた

ので五分間ほど立話をしたが、今日から一週間程留守であるといふので、その日はそれで分れて大阪で宿屋住ひをして局長の歸來を待つて二度目の會見をした。併し相變らずの理解無さなので聊か腹の立つた翁は

「事情をお話してもお判りにならねば倍額でもお納めいたしませう。併し貴官の調査疎漏にもあきれざるを得ません」

と詰ると、局長も色をなして

「中部さん、貴方のお言葉はちと過ぎやしませんか、事實が無ければ税金は取らうとは申しません」

次いで局長は言葉を續けて

「中部さん、貴方はお商賣が上手ださうですねえ」

と、皮肉ども何とも知れぬ挨拶である。それで引つ込んでゐる翁ではない。

「何億といふ收入のある人よりも私を上位に置いて、私に所得税を納めよとおつしやるが、高が知れた魚屋風情の渡世を御存じにならないのですか、之でも調査疎漏とは云へませんか、廣い日本で第二番目に私を持つて來るなんて、それでも當然とおつしやるわけですか」

此の一言に局長は答へずして、

「明石に歸つても一度税務署と御相談になつては如何ですか」

といふ。明石で相談しても恐らく埒が明くまい。そこで翁は

「宜しい、そのやうな御意見であるならば、私は朝鮮蔚山郡で魚屋を營んでゐるのであるから内地で税金を納める義務はない。今日から明石の生家の標札をはづして朝鮮に引上げます。魚屋風情でも政府を誤魔化す考へは毛頭ありません」

と歸りかけると局長の態度は急に一變して物やはらくなり、とにかく監督局から明石に局員を派遣するから、明石税務署で今一度御協議願ひたいと云ふことになつて、明石に逆戻りして協議をやり直した結果、林兼の納税問題は遂に翁の主張が徹つて解決したのであつた。翁の誠意と一本調子がこゝにもその一端をあらはしたのである。

（三）

翁が今日の大成を來せるには、幾多の基因があるのを讀者は既に御諒知のことゝ思ふが、爰にはその家庭の隱れたる美譚の一、二を書いて見たい。之は明中山內校長談話の一節である。

故こま夫人はなかなか思慮の深い、質實なしつかりした婦人にて、度々山內宅や明中へ來訪あり、その都度必ず徒步にて歸途如何に乘車を勸めても乘られず、矢張徒步で而も中學校生徒の耕作に係る野菜物を新鮮で結構であると悅んで、澤山に抱へて歸られるといふ風の人柄で、晩年まで明石の本宅に居られたが、中風症に罹り起居が不自由になつてから、下關市竹崎町の宅に移つて、長男兼市氏夫妻の行屆いた看護で天壽を全うされたのである。

逝去の一ヶ月前に小生下關に出張その病床に見舞つた時、不隨意の病體を看護婦に起させて、その時は物言ふことは出來なかつたが小生に向つて兩手を合せて感謝された眞面目な婦人であられた。

長男兼市氏夫人も質實貞淑な殊に溫和な婦人で、息子さんの敎育相談のことで度々山內宅へ來訪された。實に敬虔の念に厚い婦人である。

長孫兼次郎君は山口縣立下關中學校卒業後大學敎育を了へ、林兼本店にて實務を練習し曾て捕鯨戰中に加はつて南氷洋へ遠征した事もあり、昭和十四年十二月小生林兼商店伊東支配人の依賴にて、同商店從業員を集めて講演した時、兼次郎君は詰襟の勞働服で從業員中に交つて、その話を傾聽された質朴剛健なる青年である。

昭和十四年十月、翁と兼次郎君相携へて明中に來訪された時（別項明石中學と翁參照）應接室で茶呑み話に、小生は

「親は苦をする、子は樂をする、孫は仕事が無くて乞食するといふ世の諺がある が、本校へ多額の寄附を爲された翁は親であり、日夜その經營に當つてゐる學校長は子であり、多くの明中卒業生等は孫である。今後一層深く明中生の敎養

に努め、堅實な皇國民たらしめることを期したい」

と申した所が、翁は兼次郎君を顧みて

「只今の校長の一言は、中部家にとつても戒慎すべき好教訓である」

と申された眞面目な態度には敬服した。歸去の際頻に乘車を勸めたが乘られず、あの明中の池のほとりを悠然と歩いて歸られた、崇高な後姿をいつ迄も忘れることが出來ない。

第四章　活躍時代(二)

一、明石市と翁

翁は水產諸事業の經營上、海運の最も利便なる下關に、林兼商店の本據を定めたけれども、その生れ故郷の明石を愛するの心深く、暇ある毎に歸つて祖先の墳墓に詣で、親戚故舊と相語るを樂みとした。大正十一年明石市に中學校創設の議を聞くや、郷里の育英事業に多大の關心を抱ける翁は、直に十五萬圓の巨資を寄贈して、之が設立の促進を圖り、乃ち明石市立中學校として翌十二年四月より開校せられ、その後兵庫縣立に移管して一層の隆盛を見るに至つたが、近く昨十四年には翁中學校に來觀、大講堂新築及教室增築費に充當する金十三萬圓を縣廳に寄託せられたる如きは、別項「明石中學校と翁」に詳かである。又市立明石高等女學校に金五萬圓、明石公園その他の公共團體に屢々多額の寄附をされたのは周

知の事實である。

一方わが日本の水産界の先覺者と云ふよりも寧ろ世界的知名の翁が、大正十四年明石市の水産會長に推選せられて以來、會の發展に就いて絶えず心を寄せられ屢々水産品評會、講習會等を開催し、漁業子弟の就學奬勵、善行者表彰を行ひ、或は縣外出漁團を組織してその伸展を謀り、名産鯛、鰆の明石漬の眞價發揚、名稱、圖案の選定より、進んでその改良增産に努める等斯界に盡されたる熱誠は實に多大であつた。

之は翁がその生みの親、育ての親である明石水産界の爲に、同時に明石の公共公益の爲に盡瘁するのは、當然の義務でもあり報恩の一端でもあるといふ見地より出でられたる凡ての行動であつて、以て翁の人格の奥床しさを窺ひ知ることが出來るのである。

明石在住の市民一同は、深くこの翁の高德に感銘し、明石公園入口の公有地、舊明石城の大手門跡にその壽像を建設し　昭和三年十一月、今上陛下御即位の御大典を擧げさせ給はんがため　聖駕京都に向はせらるゝ佳辰をトして、その除幕式を擧行したのである。錦江城外風光明媚なる此の公園に杖を曳く年々幾十百萬の來園者は、伴しく翁の銅像を仰ぎその德風を慕ふと同時に、無言の教訓を蒙りつゝある。

翁の銅像は和裝、等身大で台石の上に屹立し、大阪美術專門尙美堂の鑑製に係り、精巧に彫まれたる永遠不滅の温容は、とこしへに欽仰すべきものがある。

正面の「中部幾次郎君之像」は、勳績一世に高かつた樞密顧問官伊東己代治伯爵の揮毫で、右側袖石の「所レ志在ニ國利一、誰説ニ章綬榮一、著レ眼常不レ凡、功業莫ニ與京一。」は當時の兵庫縣知事長延連氏、左側袖石の「眞像建ニ康衢一、功德亦不レ朽、郁々文敎興、流風千歲久。」は前の朝鮮政務總監、貴族院議員有吉忠一氏の筆蹟であり、孰れも永く翁の榮譽を傳ふるに餘りある。

裏面には浪華の碩儒藤澤章氏譔の漢文が刻まれてある。（漢文詩に返り點送り假名を附けたるは編者の老婆心であることを諒せられよ）

昭和戊辰一月、明石市會決議、建中部幾次郎君銅像於公園門外、以旌其功也。君家于東魚町、世業魚類牙儈。明治三十八年在大阪、偶見石油發動機船航走河上、欲用之海洋。而事屬創意、人皆難之。官亦危之、僅許試之。君乃以運海物於市場、載多行速、少風浪之阻、有給鮮之利。期年而四方則之。乃以航於土佐、朝鮮、而需給共盛、以施於漁撈網船而海利大興。又企遠洋漁業於露領北海而內外仰給矣。遂營造船鐵工之業、又謀用重油於發動機。大正八年創造完全燃燒機、其志得遂、其費大省、一世由其利矣。君又着意於啓發朝鮮、給資於南鮮、指導誘掖漁業、墾闢耕耘水田。至方魚津人、爲君建碑頌德矣。君又唱設明石中學校之議、自捐其費之半、以成之矣。嗚呼君所謂立功不朽者也。官之賜藍綬章、市之建銅像、誰謂不宜哉。余又以知其使後人感奮興起者必大也。

昭和戊辰秋　　浪華　藤澤章士明譔

次に當日の除幕式協賛會長であつた明石市長の式辭を揭げ、その他多數の祝辭を省略する。

式辭　　土州　池幸尙志書

語ニ曰ク、立德實行之ヲ不朽ト云フ。ト、中部幾次郎氏ノ如キハ豈亦不朽ノ功ヲ立テタルモノト謂ハサルヘカラス。

氏ハ資性謹嚴幼ニシテ穎悟、夙ニ父祖ノ業ヲ繼イテ水產業ニ從事シ、我國水產界ニ於ケル偉大ナル功績ハ實ニ筆紙ニ盡シ難キモノアリ。

即チ氏嘗テ石油發動機ヲ鮮魚運搬ニ利用スルコトノ劃切有利ナルコトヲ想起シ萬難ヲ排シテ之カ完成ヲ期シ、更ニ之ヲ一般漁業ニ應用スルコトヲ創始シ完全ニ其ノ効ヲ奏セリ。彼ノ明治三十八年以降僅々二十有餘年ヲ經サル今日動力漁船數實ニ一萬五千隻ヲ算スルノ盛況ヲ來シタルモノ、一ニ同氏ノ賜ナラサルハナシ。尙氏ハ各種ノ發明改良ニヨリ或ハ漁業操作能率ノ增進或ハ鮮魚販路ノ擴

張等斯界ニ貢献スル所頗ル多ク加之冷藏製氷、造船鐵工、製網、製鹽、精米等各種ノ事業ヲ興シ、又本邦食糧問題解決ノ一策トシテ朝鮮ニ廣漠タル水田ヲ經營シ產米ノ改良增殖ノ研究ニ力メ、又朝鮮及內地ノ各所ニ於テ各種ノ公益事業ニ巨額ノ私財ヲ寄附スル等其ノ功績枚擧ニ遑アラサルナリ。就中曩ニ明石中學校ノ創設ニ際シ巨額ノ醵金ヲナシ同校ノ建設ヲ容易ナラシメタルカ如キハ直接本市ニ享クル恩惠ノ甚大ナルモノニシテ市民ノ新ナル記憶ニ存スル所ナリ。實ニヤ積善ノ家ニ餘慶アリト、宜ナル哉去ル大正十一年十一月勅定ノ紺綬褒章ヲ下賜セラレ又昭和三年九月公衆ノ利益ヲ興シ其ノ功績顯著ノ故ヲ以テ藍綬褒章下賜ノ光榮ニ浴セラル。

更ニ氏ハ天性至孝ニシテ祖先ノ靈ニ祀事スルコト厚ク且ツ愛鄉ノ念ニ富ミ、目下下ノ關ヲ以テ事業ノ本據トセルニ拘ラス常ニ故鄉タル本市ヲ訪ヒ親戚故舊ト舊交ヲ溫ムルコトヲ怠ラス其ノ情誼ノ篤キハ衆人ノ敬慕措カサル所ナリ、想フニ氏ノ如キハ洵ニ鄉黨ノ模範トスヘキモノニシテ永ク其ノ功績ヲ記念スルト共ニ一般市民竝ニ青年子女教養ノ指針タラシメムコトヲ期シ茲ニ氏ノ壽像ヲ建設ス。今ヤ其ノ工ヲ竣フルニ方リ之カ除幕式ヲ擧ケ不肖亦之ニ與ルノ光榮ヲ有ス乃チ數言ヲ陳シテ除幕ノ辭トナス。

蓋シ洋々タル氏ノ功績ハ此ノ壽像ト共ニ不朽ニ垂レム。

昭和三年十一月六日

明石市長正七位　磯野鶴太郎

翁の積年の功績畏くも　天聽に達し、皇紀二千六百年の十一月十日、特旨を以て位紀を賜ひ正六位に敍せられたることは、聖恩の優渥なる誠に恐れ多き極みであり、翁の感泣禁じ難いものがあつたと傳承した。翁の破格の光榮は即ちその鄉土明石の至上の名譽であり、明石市教育會は不取敢翁を招待して、時局柄質素なる祝賀會を開き、翁の誠歡誠喜を分つてその健康と發展を祈つた。當日の頌德文は次の如くである。

正六位中部幾次郎翁

光輝アル紀元二千六百年式典ヲ擧ゲサセラル、ニ當リ翁ハ我國産業界ニ對スル功績顯著ナル廉ヲ以テ特旨叙位ノ恩典ニ浴セラル是レ啻ニ翁ノ光榮タルノミニ止マラズ實ニ我ガ明石市ノ名譽ト謂フベシ

翁ハ夙ニ水産振興ニ非凡ノ創見ヲ有セラレ石油發動機船ノ建造ト改良進歩ヲ圖リ或ハ漁獲ニ加工ニ冷凍ニアラユル水産事業ニ常ニ其ノ先覺者トシテ竭サレタル功績ハ我ガ産業史上ニ不朽ニシテ加之朝鮮農場開拓ニ或ハ南氷洋捕鯨爭覇戰ニト樹立セラレタル殊勳ハ枚擧ニ遑アラズ而モ翁ハ其ノ收益ヲ以テ公益世務ニ貢献セラレ就中國家ノ將來ハ少國民ノ雙肩ニ在リトノ信念ヲ以テ明石市教育事業ニ投ゼラレタル資金ハ實ニ巨額ナルモノアリ我等明石市教育會員一同ハ滿腔ノ喜悅ヲ以テ茲ニ翁ノ爲ニ祝賀式ヲ擧行シ謹ミテ翁ノ光榮ヲ賀シ其ノ健康ト發展ヲ祈ルト共ニ益々後進ノ少國民ヲ奮起セシメントスル念願ヲ以テ目下翁ノ立志傳記ヲ編纂中ナリ。

茲ニ該目錄ヲ贈呈シテ聊カ感謝ノ微忱ヲ表シ併セテ其ノ高德ヲ頌ス

皇紀二千六百年十一月二十日

明石市教育會長

正五位勳五等　山内佐太郎

二、明石中學校と翁

翁が公共團體中の教育事業に寄附されたる金額も相當巨額に上る。方魚津尋常高等小學校、明石中學校、明石高等女學校、山口縣水産講習所等をその主なるものとする。左に明石中學校、昭和十四年十二月發行の同校機關誌「明中魂」より山内校長朝禮訓話の要領を摘錄する。

中部幾次郎翁といへば、明中創立當初拾五萬圓を寄贈して下さつた篤志家であつて、翁の御蔭で明中が發芽發育していつたのである。その中部翁が去る十月一日令孫兼次郎君を同伴して明中に來訪せられ、校長の案内で校内を隈なく巡視の上述懷していはれるには「十八年前の十五萬圓の寄附は隨分心を痛めた。

併し衷心教育を思ひ、郷土明石を念じての事であつたが、今日本校の現況を參觀して欣快の至りに堪へない。教育の爲に推讓することは何よりの第一義と確認する云々」と、非常なる滿足を表せられ、「此の上本校教育を通じて、何か國家教育に一燈を捧げたいが適當の施設は」との御質問に對し、山内校長は、現存の講堂は市立時代に定員八百名の積りで出來たのであるから、現今の千有餘名の職員生徒に對しては甚だ狹隘で困つてゐる旨を述べ、更に大講堂の建築を希望したのに對し、翁は一つ其の見積りを出されよと申された。翌々十月三日に校長は、翁の本宅を訪問して寄附行爲の目的物たる大講堂に拾萬圓の寄附承諾を得たのであつた。然るに明中には近年六百名内外の入學志願者があり殊に最近川崎飛行機工場等幾多の工場新設に伴ひ、入學志願者激增する傾向あり、是非とも學級增加の必要を生じ、從つて教室增築の要を痛感する實情を翁に具陳した結果、明中の發達と教育に關する熱心は、慈父の愛よりも濃かなる翁は

大講堂建築費へ　金拾萬圓

學級增加に伴ふ校舍增築費へ　金參萬圓

但し理科室新築

計金十三萬圓の寄附行爲申込を、昭和十四年十二月七日附を以て、坂兵庫縣知事宛に提出されたのである。是啻に明石中學の喜のみに止まらず、全日本教育界の歡喜であり、眞に感謝感激に堪へざる次第である。

此の大講堂は非常時局に際し鐵材使用不可能の事情に因つて、即時建設の運びに至らず、資金十萬圓は別途に積立てられてあり、理科教室は十五年四月起工後、請負大林組の不休の努力によつて八月末竣成、九月初に移轉を完了し、明中千百有餘の生徒一同は、翁に感謝の赤誠を捧げ、その萬一に報ずるため、理科學の研究に勵んでゐる。

理科室增築移轉の後、翁の來校を迎へた生徒達の喜悅は、一方ならぬものがあつた。生徒代表の感謝狀を次に掲げる。

私共ノ明中創立當時巨萬ノ資財ヲ投ジテ本校ノ開校ヲオ助ケ下サイマシタ、大恩人中部幾次郎翁ハ、夙ニ産業報國ヲ志サレ、水産振興ニ、農村開拓ニ、内地ニ、朝鮮ニ、或ハ北洋ニ、南洋ニ、遠ク日新丸ニテ南氷洋ノ捕鯨戦ニト、樹テラレマシタ御偉勳ハ擧ゲテ數ヘルコトガ出來マセン。

更ニ多年翁ガ公益世務ニ盡サレタル其ノ御功績ハ實ニ顯著デアリマス。而カモ翁ノ自ラ奉セラルヽ、甚ダ儉素デアリマシテ、公益事業ニ盡サル、德風ハ洵ニ景仰感謝ニ堪ヘマセン。

特ニ鄕黨ノ子弟ヲオ思ヒ下サル至誠ヨリ、昨年亦時勢ノ進運ニ伴フ本校教育ノ爲ニ、巨額ノ資財ヲ投ジテ理科室ノ增築ヲ賜ハリマシタ。

今ヤ其ノ工成リ私等一同ハ日々其ノ恩惠ニ浴シテ居リマス。同時ニ本校記念大講堂ノ新築ノ爲ニ巨萬ノ資財ヲ御寄附下サイマシタト承ツテ居リマス。遺憾乍ラコレハ時局ノ爲ニ鐵材ヲ得難ク、止ムコトヲ得ズ其ノ建築ハ延期サレテ居マス。然シナガラ、私共生徒一同ハ翁ノ恩德ニ浴シマスコトヲ、一日千秋ノ思ヒヲ以テ待チ焦レテ居リマス。

本日茲ニ目ノアタリ大慈悲ノ翁ヲ迎ヘ、生徒一同ハ熱誠ヲ籠メテ其ノ洪恩ヲ感謝シマスト同時ニ、翁ノ御健勝ヲオ祈リシテ息マナイ次第デアリマス。

昭和十五年十月二十一日

兵庫縣立明石中學校生徒千百四十名

總代第五學年　野　間　廣

三、方魚津と翁

方魚津は明治四十三年以來三十年に亘り、翁の朝鮮に於ける諸事業の根據地となつた所であつて、即ち翁の出祥の地とも稱すべき因緣の深い港である。

翁は此處で水産業のみでなく、各種の事業を起して、地方開發のために盡力し當時寂莫たる一漁村が今日の繁榮を見るに至つたのは、一に翁の先見の明と、勇往邁進の偉力に因るものである。

方魚津の位置は、慶尙南道の東南部蔚山灣に臨み、朝鮮東南海岸唯一の避難港として、また附近漁業の根據地として重要な港である。現今は人口三千六百（內地人千五百）を有するが、漁業繁閑の時期によつて居住者の增減著しく、最盛期には港內船舶居住者を合して三萬を超えることがある。

港は蔚山灣東岬の南端に位し、三方丘陵で圍まれて南に開き港內水深く、港口に小島琴島と、工費七十萬圓を投じて築造された防波堤があるため、外海波浪の高い時でも港內は極めて平穩である。漁業の最盛期は九月から翌年三四月に及ぶ。漁獲物の大部分は鯖である。昭和四年の漁獲高は鯖、鰺、鱈、鰤等の約二百萬圓である。釜山に每日汽船往復の便があり沿岸航路の汽船も寄港し、陸上には蔚山に自動車が通ふ。

翁は此の地を中心とする開發の爲に多大の力を盡され、慶尙南道官選評議員として、同水產會議員として、唯一個人の利のみをはかる產業人としてで無く、公衆のために身力を竭し巨財を投じ、平生居を內地に有しながらも一營業所の所在地たる此の地の公共事業にして、翁の力に賴らざるもの絕無なりと云はれる公益貢獻の精神である。

大正七年、方魚津學校組合管理者となつた翁は、方魚津尋常高等小學校新築校舍と敷地の全部を寄附し、その後增築もみな翁の力に因つたものである。

又方魚津港防波堤工事の議が起つた時、翁は下層民のため數千圓を負擔し、自らは十萬圓を提供して其の起工を速かならしめ、東面消防組の組織せられるや其の後援に巨費を投じ、帝國在鄕軍人會方魚津分會の設立に際しては、名譽會員として顧問として財的援助を爲し、公益事業の爲に貢獻せられた事は枚擧するに遑が無いのである。

大正十一年十一月には、勅定の紺綬褒章を、昭和三年九月には同じく、藍綬褒章を下賜の恩命に浴せられた。

昭和三年の秋、聖上陛下御即位の盛儀を擧げさせ給ふに當り、方魚津幾千の港民は、この翁の德行美擧を景仰し、永く之を後代に傳へんため、方魚津尋常高等

小學校庭景勝の地に、眞心籠れる功績碑を建設した。碑石の高さは台石を合せて二十尺に達し、題字は前朝鮮總督齋藤子爵閣下の揮毫に係り、碑文は關西の碩儒長尾甲氏の撰、書は浪華の名家黑田研堂氏の筆に成る。

除幕式は慶尙南道知事水口隆三閣下其の他多數の官民臨場、極めて盛大の裡に擧行された。爰には其の式辭一篇のみを揭げる。

茲ニ中部幾次郎翁功績碑建設ノ工成リ閣下並ニ各位ノ御來臨ヲ辱ウシ本日ノ佳辰ヲトシ除幕式ヲ擧グ誠ニ欣快ノ至ニ堪ヘザルナリ。其レ翁ハ水產界ノ功績特ニ顯著ナルモノアリ其ノ經營廣ク製造工業農事開拓ニ及ビ名聲中外ニ普ク只管利用厚生ヲ念トセラレ巨資ヲ惜マス常ニ社會公共ニ奉仕セラレ紺綬藍綬ノ兩褒賞ヲ賜ハル誠ニ宜ナリト言フヘシ。

吾カ方魚津ハ翁・出祥ノ地ニシテ港民ノ齊シク誇リトスル所翁ハ亦第二ノ故鄉トシテ其ノ發展ニ盡瘁セラル、コト切ナリ。就中二萬數千圓ヲ投シテ小學校舍ヲ建築シ敷地ト共ニ寄贈セラレ更ニ防波堤ノ築造ヲ主唱シ進ンテ數萬ノ財ヲ寄

附セラル、等其ノ他陰ニ陽ニ本港開拓ニ貢獻セラレタルコト擧ケテ數フヘカラス。

港民其ノ德ヲ頌シテ功績碑建設ノ議アルヤ遠近物ノ響ニ應スルカ如ク爭テ淨財ヲ醵出スルモノ蝟集シ立所ニシテ六千餘圓ニ達ス翁ノ餘德碑石ト共ニ萬世ニ朽チサルヘシ建碑ノ規模敢テ大ナラスト雖モ而モ港民ノ熱誠以テ之ヲ償ハントス翁幸ニ之ヲ諒トセラレ希クハ益々本港開發ノ爲ニ指導セラレンコトヲ。不肖新太郎建設會長ノ任ヲ辱カシメタリト雖モ魯鈍至ラサルヲ憾ム。一言蕪辭ヲ以テ式辭トス。

昭和三年十二月九日

中部幾次郎翁功績碑建設會長

藤本新太郎

四、下關市と翁

翁が水産業の本據を下關に定めたのは明治三十七年で、當時日露の戰爭は已に酣に、わが國民は上下戮力、一心同體、國運を賭して奮進しつゝある眞最中であつたのである。

下關港は西日本海陸運輸交通の中樞点に位し、朝鮮、滿洲、北支中支へも、或は浦塩、沿海州、樺太へも、若しくは台灣、印度支那方面へも、所謂四通八達の要衝として、かやうな便利なる港は、こゝの外には無いのである。

翁が水産諸事業發達の根據に此の地を選んだといふことは、全く時と所とを得たものであつて、爾來駸々たる國力の進展と軌を同じうして、たゞ擴大の一路を進んだのを見るにつけても、翁の非凡の卓見を知ることが出來るのである。方魚津を以て翁の出祥の地とするならば、下關はその大成の根柢である、日の丸の扇の要めである。

下關經營事業の中心を成す彦島冷藏庫の創設は大正九年である。その設計には瑞典より招聘した專門技師のブライン式冷凍機によつて、細心に指定の温度を守つたけれども、或時はフライ・ホールが破裂して多數の負傷者を出し、冷藏庫內の澤山の鮮魚が腐敗して困つたこともあつた。之より先き米國式に倣つた葛原冷凍會社の如く日本の氣温や濕度を無視して失敗したる外人技師依存の前轍に鑑み不屈不撓の研究心に富める翁獨自の考案を累ね、涙ぐましい苦心と、堪へ難い幾多の犧牲と經驗とに因つて、遂に日本の實情に即應した優秀な冷藏庫と、それに併行する冷藏船を建設したのである。冷凍魚の眞價を認識するに至つたのは近年のことで、當時は某々漁業會社でも、翁の計畫を冷笑してゐたといふことである。前人未發の境地に進まんとする翁の面目が、こゝにも現はれて來たのである。

彦島に造船鐵工所を建設したのは大正七年である。當時發動機の改良進歩に熱中して、日も之れ足らなかつた翁は、有水式發動機の不便を除く爲に、この造船所を設けるや否や、直にその研究を續行した。その頃輕油は價が不廉で品も不足

してゐた時であつたので、翁は發動機に重油使用の必要を痛感し、重油使用の無水式研究を完成して、その專賣特許權を獲得したのである。爾來此の造船鐵工所が翁の諸事業の上に、いかに多くの大切な活動を爲したるかは、周知の事實につき、こゝに之を省略する。

なほ當彦島冷藏庫へ、大正十五年五月三十一日、畏くも攝政宮殿下の御名代として、本多侍從の御差遣を辱うし、又昭和十四年三月二十日には、高松宮殿下の御成あり本社各工場の御巡覽を蒙りたるは、洵に感激に堪へざる無二の光榮であり、謹んで項を改めて記述致しました。

翁が下關や山口縣關係の公共諸團體に貢献したることは少からぬものがあり、昭和十二年以後に屬するものにても、水産講習所增築に八萬三千餘圓、日本青年協會に五萬圓、縣警察官療養所設立に三萬圓をはじめ、教育、衛生、警防、保護事業等に及びて金二十萬圓以上に達し、近く十五年十二月には林兼商店及大洋捕鯨株式會社より、出征將士の積日の赤誠を感謝せんため、金壹百萬圓を陸海軍に献金し、之を下關市廳に寄託された。

五、無上の光榮

大正十一年十一月、公益の爲多額の金圓を寄附し功績顯著なる廉を以て、中部幾次郎に勅定紺綬褒章を下賜せられました。

同十五年五月廿九日、攝政宮殿下山口縣へ行啓の御砌、縣廳に於て當社出陳の冷凍魚に御目を留めさせられ、御土産として納付せよとの有り難き御諚を拜し、直に萬全の方法を講じて宮内省へ御納めの手續を致しました。

翌々五月三十一日御名代として御差遣の本多侍從は當社彦島冷藏庫を視察せられました。社長中部幾次郎以下家族、社員一同整列し、謹んで御送迎申上げました。

昭和三年九月、水産業發達に盡瘁し公益を興し成績顯著なる廉を以て、勅定藍綬褒章を下賜せられました。

同十四年三月二十日、高松宮殿下當社御視察に御成あり、午後二時半彦島工場に御着、中部社長以下重役社員一同の御出迎を受けさせられ、第一工場（鐵工所、冷藏庫、製函工場、漁網工場）第二工場（鐵工所）第三工場（鑄物工場）と順次御視察あり、記念の御撮影遊ばされ、御歸途當社トロール船大洋丸の荷役を御一覽の際、御自ら御乘船親しく御台覽あり、甚だ御滿足の御樣子を拜察致しました。御巡視時間を一時間餘も御延ばしありし趣にて、當社として非常に面目を施しました。

同十五年十一月十日、紀元二千六百年式典の御盛儀に際し、特旨を以て位紀を賜ひ、正六位に叙せられました。

聖恩宏大無邊眞に恐懼に堪へず、ひたすら無上の光榮に感泣し、一入奉公の誠を捧げんと存ずる次第であります。

第五章　大成時代

一、最近の翁と其の家庭

翁の好逑こま夫人は、明石郡神出村の庄屋藤井氏の出で、天資温良貞淑よく夫を助け、翁をして後顧の憂なく專ら力を水產公益に盡瘁せしめ、以て今日の盛大を成さしめたのである。

翁に三男三女があり、長男兼市氏は林兼商店專務取締役、次男謙吉氏、三男利三郎氏は共に同常務取締役である。長女もと氏は津名郡安居院氏に嫁し、次女とめ氏は悅良氏を、三女よし氏は義吉氏を婿養子に迎へて、悅良氏は同常務取締役義吉氏は同取締役に就任し、協力一致各々その職域に精勵して居られる。是等の人々を始めとして、甥、孫等の一族が擧りて翁の傘下に蝟集してその事業を分擔する。翁の愛孫は早や二十六人に及ぶといふ、積善の家に餘慶ありとは眞に此事

である。たゞ惜むらくは長女もと女、三女よし女の既に歿せられたのと、こま夫人の昭和十四年八月二十四日死去された事である。

翁は今や七十五歳の高齢にもかゝはらず、林兼商店の總帥としての劇務に當られ、常に慈愛に充てる温顔を以て部下に接し、悠揚迫らざる襟度を以て萬事を裁決せられる。毎早朝起床後、冷水摩擦をなし體操を缺かさず、青壯年時代に海氣で鍛錬したる體軀は磐石よりも固く、老いて益々盛んなる意氣を以て、國家的大事業に當られつゝある。

長男兼市氏はよく翁の意を承けて事業に熱意あり、次男謙吉氏誠實穩健に社務を鞅掌せられ、參男利三郎氏志操鞏固に率先南氷洋遠征に奮鬪せられ、當會社の中堅である。先年利三郎氏は親しく明石中學校に來校せられ勇壯なる体驗談を話され青少年學徒に對し最も力强き薫化を與へられた。悅良、義吉の兩愛婿は共に得難き良重役であり、伊東常務亦稀に觀るの人物其の他濟々たる多士の協力一致其事に當らるゝ林兼の前途實に洋々たるものありと謂ふべきである。

二、處世訓

翁が平素部下社員に諭される訓言は

一、高く買ひ、安く賣つて儲けよ。

一、同業者より常に三年間は先きを歩け。

意味頗る深長で深く服膺すべき金言である。

率先身を以て範を垂れられたる其の言行がみな是れ處世訓であることは、今更絮說を要しない所である。

三、翁の現職

一、會社社長

株式會社林兼商店社長、大洋捕鯨株式會社社長、中部農事株式會社社長、羅老島電氣株式會社社長

帝國水產會特別議員、明石市水產會會長、下關市水產會議員、日本冷凍協會常議員、日本動力協會員、恩賜財團濟生會特別會員、兵庫縣水產會特別議員、帝國海軍協會評議員、山口縣防空委員、山口縣定置漁業研究會長、下關商工會議所會頭、山口縣職業紹介所委員、山口縣地方物價委員下關市社會教育委員、恩賜財團軍人後援會山口支部評議員、山口縣人事調停委員、下關市自治振興會委員、國民精神總動員下關市實行委員、帝國發明協會特別會員、山口縣教育振興會議員、山口縣協和會評議員、財團法人大日本防空協會山口縣支部評議員、財團法人大日本防空協會山口縣副支部長、借地借家調停法借地法調停委員、結核豫防會山口支部評議員、山口縣水產會價格協定委員、山口縣港灣調査會委員職業協會山口縣支會理事、日本マニラ麻網商業組合山口縣副支部長

四、林兼商店概況

大正十三年九月、中部幾次郎翁の個人經營となつてゐた事業全部を株式會社組織として、資本金五百萬圓の株式會社林兼商店、資本金參百萬圓の林兼漁業株式會社、資本金貳百萬圓の林兼冷藏株式會社の三會社を設立したが、同十四年五月以上の三會社を合併して株式會社林兼商店となし、其の後、增資して現在資本金壹千五百萬圓全額拂込濟となつてゐる。

本　店　下關市大字竹崎町六一

支　店　青森、東京、長崎、台灣、朝鮮、滿洲の六支店

營業所　塩釜、大阪、嚴原、羅老島、方魚津、釜山、長箭、厚浦、新浦、淸津

海南島、芝罘、石島、北支、中支の十五營業所

出張所　內地、朝鮮、台灣、滿洲、山東省、樺太、中支、北支其他約五十個所

事業概要

一、鮮魚運搬販賣業

大小百四十隻の運搬船と、五十餘隻の母船之に從事す。

二、定置漁業並巾着網漁業

鰤、鰮、鰊等の定置漁業、五十五箇所、巾着網漁業五十三隻。

三、トロール漁業

八隻のトロール船之に從事す。

四、手繰網漁業

下關、長崎、基隆、高雄、メキシコ、清津、浦項等の根據船六十三組。

五、其他の漁業

棒受網漁業二隻之に從事す。

六、冷凍工船

各漁場にて漁獲せる魚を船内にて冷凍す。

從業船　天洋丸、地洋丸、大洋丸、播州丸、第五播州丸、第六播州丸。

七、水產物製造加工業

（一）罐詰製造

（イ）蟹罐詰　清津、長箭、方魚津の三工場

（ロ）鯖罐詰　清津、長箭、方魚津、土井首の四工場

（ハ）鰮トマト漬、唐辛漬、味付罐詰　清津、長箭、相浦、土井首の四工場

（二）其の他果實罐詰、魚類罐詰

（二）魚油肥製造

（イ）鰮油　厚岸、銚子、興津、清津、西水羅、方魚津、雄尙洞、新浦、長箭、相浦、土井首の各工場

（ロ）魚粉末、〆粕製造

清津、相浦、土井首、西水羅、雄尙洞、新浦、長箭、厚岸、銚子、興津の各工場

八、冷凍、冷藏並製氷業

ブライン冷凍法、超急速冷凍法による冷藏庫、空氣冷凍法に彦島、群山仁川、羅老島、青森、清津、東京、高雄、桐生、長崎、塩釜、海南島等を主なるものとして、其の他滿洲、北支にあり。

九、冷凍販賣部

各種冷凍魚の販賣に從事す。

十、貿易部

各種冷凍魚、冷凍鰕の海外輸出入に從事す。東京、大阪、下關、長崎に出張所あり。

十一、鐵工造船業

（一）彦島鐵工所

本社船舶部に於て實地試驗の上製作するを以て成績優秀林兼式無水發動機として世上に好評を博し農林省指定工場たり。

（二）長崎鐵工所

十二、商事部

營業品目　麻網、漁網、船具、機械、船舶、金物、製函、木材、石油、氷、石炭等

（一）製材製函工場　下關市彦島町

（二）漁網工場　下關市彦島町

（三）石油販賣部　陸上タンク五ヶ所、タンク船、配給船

關係（投資）會社

大洋捕鯨株式會社、羅老島電氣株式會社、方魚津鐵工造船株式會社、昭和鮪罐詰株式會社、中部農事株式會社、大東食品株式會社、基隆冷藏株式會社、遠洋捕鯨株式會社、興安水產株式會社、西台灣水產株式會社、濟州島漁業株式會社、擇捉水產株式會社。

（廣さ、能力、噸數等は防諜等の關係より省略す）

後記

○

中部翁に就いての感想の二、三を申上げて見たいと思ひます。

一、事業に對して驚くべき熱心家であり、努力家であること。

本年既に七十五歳の高齢であり、會社の社長をなされて居りながら、唯今でも會社で一番忙しくて而も一番働き手は誰かと申せば、翁自身であります。

二、驚くべき堅固なる信念を保有して居らるゝこと。

而して何事も此の信念に基いて處理せらるゝことがあり〳〵と見える。從つて初見の人には、一寸頑固な方だと云つたやうな誤解を招く恐も、或は無いではありませんが、靜に翁の一言一行を觀察しますれば、翁の持前の堅き信念に立脚して居られることが判然として、おのづから頭がさがる筈です。即ち近時稀に見る意志の鞏固な人であることが諾かるゝと思ふ。

三、事に臨みて即斷果決、實にあざやかなものである。

而して必ず大局を見透して、決して方針を誤らるゝやうなことが無い。

四、如何ほど大事に臨んでも、決して驚駭された樣子が見えないと同樣に、また大層嬉しい吉事を報告しても、さして嬉しそうな樣子が見えない。所謂喜怒哀樂をみだりに色に現されない君子であると思ふ。

本社　伊東猪六

（伊東氏ハ林兼本社ノ支配人ヲ勤務セラル、編者記）

○

正六位勳六等　佐々木壽雄

私は明石教育會長山内佐太郎先生とは多年親交を辱うしてゐる一人であります。過般中部翁の傳記編纂に關し、同氏より私に修訂を依囑し、原稿を送附せられました。私は未だ中部翁の謦咳に接したことはありませんが、原稿を繰返し拜讀して深く翁の立派な人格に感服しました。產業人としても社會人としても、翁

の如き優秀なる人士は容易に之を求めることが出來ない。誠に明石の生んだ近代の偉傑であり空前の誇であり、明石市の方々は勿論であるが、同縣人としての私に至るまで肩身の廣い感が致します。然る處傳記の本體は事實であつて、文藻であつてはならぬ。況してかゝる偉人の傳記は正確なる實錄でなければならぬ。決して浮華冗漫なる小說的のものであつてはならぬ。少くとも年次と史實と相伴つて信憑に値するもので無くてはなりませぬ。こゝに於て年次事實の調査等につき山內先生の盡力により林兼本社、支配人の幹部諸氏に調査を煩すこと數十回に及び其の確實を期しました。

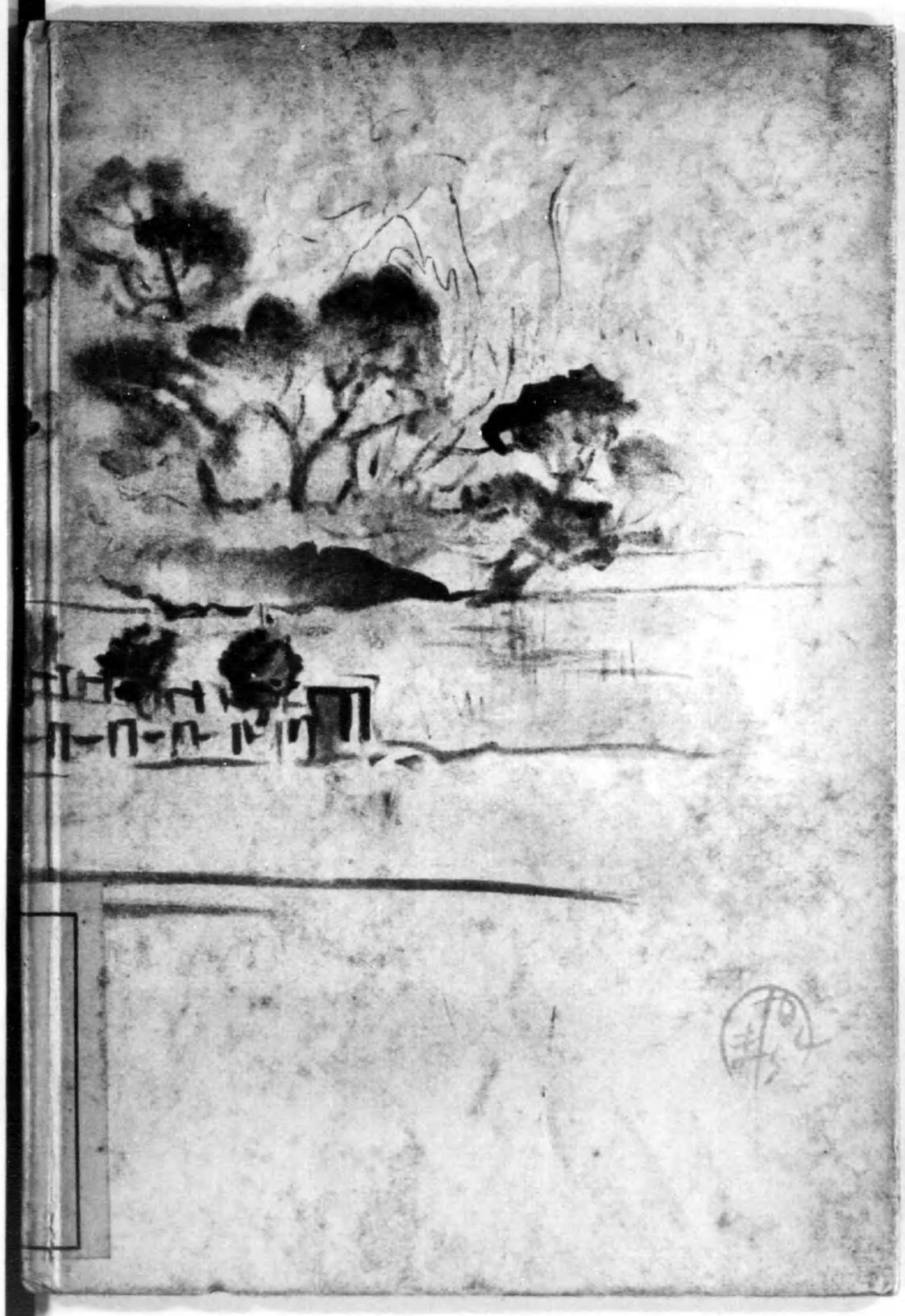
本編に關與して痛感したことは、翁の包容力の絕對的に大なること、令息方重役陣の結束力の極めて鞏固なること、之が兩々相倚り相扶けて今日の大成を致された主因であり、敬服を禁じ得ない所であります。同時に教育報國に精進して翁の功績弘通に努められたる明石市教育會に感謝する次第であります。

昭和十六年二月廿八日印刷
昭和十六年三月三日發行　（非賣品）

編輯兼發行者　兵庫縣明石市　明石市教育會　代表者　山內佐太郎

印刷人　大阪市東淀川區中津南通二丁目三〇番地　光延有三

發行所　兵庫縣明石市　明石市教育會

904
197

終